

とも云はずに現はせるところにして、句づくりの妙、再三吟誦せよ、人をして感涙の下るを覚えざらしむるものなり、何の西を論じ東を論ずるの閑葛藤の餘地あらんや。彼の楞嚴經に説けるが如く、眼の功德は八百、耳の功德は一千二百、しかも六根は一なりとせんや六なりとせんや、却波羅天の奉る所の華巾の六結の如し、畢竟同中畢竟異を生ずるも、結心に於て解けば、六解一亡す。羅漢羅擊鐘の諭示に於て、「汝尙顛倒して聲に惑ひて聞と爲す」と、阿難は佛の叱咤を得たらずや。それ聲といひ聞といふところだに、逐念流轉の本源たり、況んや鐘聲の東よりし西よりすといふに於けるをや、如何ぞ此句の真趣に參得せん。佛阿難に告げたまはく、「若し生滅を棄て、眞常を守らば、常光現前して、根塵識心、時に應じて銷落せん、想相を塵と爲し、識情を垢と爲す、二つ俱に遠離せば、則ち汝の法眼時に應じて清明ならん」と。此句たゞ弦月暮鐘の景を敍せるに過ぎねど、情趣幽曠、おのづから根塵識心應時銷落の境をあらはすに似たり。前句とのかゝり玄妙にして、如何にも精修幾年の衲子の山寺の夕に立ちて忽然所得あるが如きさま見ゆ。これを「鐘聲と共にはらりと散る罌粟花の風情に横

手打つて悟る鐘樓近き禪堂の態なり」といへるは、けしの花に泥み過ぎ、強ひて更に八百の功德裏に一句を攝せんとするもの也。罌粟は夕風のそよ吹く頃に散るよりは、雲も動かぬ眞晝の晴にこそ散れ、まして三日月のほのかなるほかは既に暗くなりたるをや。又鐘樓近き禪堂のあたりに罌粟圃の在る有らんも似合はしからぬことなり。然のみ、そくひ附に解せざるも可ならん、たゞ禪寺閑寂なるに弦月暮鐘を附けたりといふ舊解の方、却て勝らん。老杜の詩の句「陰壑生虚籟、月林散清影、天闕象緯逼、雲臥衣裳冷、欲覺聞晨鐘、令人發深省」の晨鐘を暮鐘とし、有明を三日月とすれば、情景殆んど似通ふものあり。音聲によりて悟るもの、橋陳那五比丘あり、觀世音菩薩あり、文珠法王子觀世音菩薩を讚歎して曰く「聲無きも既に滅無し、聲有るも亦用に非ず、生滅二ながら圓離す、是則ち常眞實なり」と。鐘聲西より來るや東より來るや、試に道へ。噫吾亦饒舌せり。

秋湖かすかに琴かへす者

野水

此句舊解紛々として、皆正しき據りどころを失ひ、あらぬことのみを云へり。「白虎通」を引きて「琴在南方、鐘在西方」といへるを擧げたるあり、何等の事とも其意知り難し。又「論語」の「子與人歌而善、必使反之、而後和之」を引きて、かへすは反復するなりといへるあり。論語のは歌を反さしむるなり、琴を反すとは何の事か知り難し。又「源氏物語松風の卷」の「調べもかはらずひきかへし」の語を擧げ「狭衣の琵琶ひく條」の「搔き返し」同じいなごまろにて時移る」といふを擧げて、幾度も同じ曲を弾きかへすを、琴かへすとはいふなりと解せるもあり。稚き兒の岡崎女郎衆を弾くやうにて、人をして笑を發せしむ。琴を返却するとのみ釋せるもあり、借りたる時は借りたれども、はやくも興盡きたれば弾かで其まゝ返すは、例のもの好なり」と釋せるものあり。據るところ正しく出典に中らねば、其解おのづから僻み、或は妄意をもて測れば、其釋つひに理無し。是皆「袖中抄」を忘れて擱ける過失なり。「袖中抄卷六」かへすものゝくだり、あづま琴はるのしらべをかりしかばかへしものとは思はざりけり「太秦の顯昭云ふ」此は中務親王琴借りて詠みてつかはす。伊勢かへし。かへしてもあかぬ

心を添へつれば常より聲のまさるなるらむ顯昭説きて曰く、かへしものとは古今神遊の歌の中に、とりものゝ歌、ひるめの歌、かへしものゝ歌とあげたり、かへしものゝ歌には、青柳をかた糸によりて鶯のぬふといふ笠は梅の花笠。眞鐵ふく古備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ。美作や久米の皿山さら／＼に我名はたてじ萬代までも。今案に、此歌等は催馬樂なり。神樂譜に云ふ、朝闇吹返す催馬樂拍子云々。或本云、あさくらや木のまろどのに我が居れば名のりをしつゝ行くやたれ。此歌爲御所返歌是延喜二十一年勅定也。神樂遊仕る時は神音振唱。又云、星已了、搔返絲竹て可仕朝倉き催堪能之歌人、私云、朝倉うたふをば、あさくらかへすといふ、或は吹返といひ、或は搔返絲竹といへり、或は催馬樂拍子といへり、仍てかへすとは云歟、かへすと云ふ事は、其歌を又とくかへすところそいへ、此返しは笛も琴も別にしらべあらたむる歟、催馬樂の拍子といふにてしりぬ、又古今の返しものゝ歌といふは、多くは催馬樂呂律の歌なり、さればかへすとは催馬樂拍子に吹きなし弾きなしして朝倉を歌ふなるべし、神樂家の人に尋ぬべし。今の歌はあづま琴をおそくかへすとて、かへ

し物の事によせて、返さぬことを添へよめるなるべし」と。顯昭が此解によれば、かへすとは「調を改むる」にて、其本源は笛にても琴にても催馬樂拍子に吹きなし弾きなすことをいふより出づるなり。されば琴かへすは、琴の調を今まで盤渉調ならば盤渉調に弾じ居たるを、黄鐘調ならば黄鐘調に改むるをば云ふなり。調を改むることは琴にも三絃にも何にもあり。句中の琴かへすはこれにて明らかにて、樂器の琴をかへすにはあるべからず、中務親王と伊勢との贈答の歌によりて、古き語のかへすといふを用ゐ、湖上にて琴を弾じ居れる者の、三日月の空に暮鐘の水を渡るを聽きて、時に應じ景に應じ、琴の調を改むる趣を云ふなり。「同じ曲を彈返す」と曲齋の解せるは、餘りに湖上舟中の人を、今頃は半七さんといふ一口淨瑠璃をのみ繰返す入込風呂の中の人如くに見做して、前句とのかゝりも何の味無く、折角鐘の聲に琴を附けたる機轉の妙をも作用無きものとなせりといふべし。「琴を借りて而も彈かで返す」などいふ舊解の取るに足らざることとは辯を須たぬことなり。因にいふ、顯昭は俊成定家頃の歌人中の碩學にして、其袖中抄は吾人に惠を貽せるものなるが、前に

擧げたる伊勢の歌といへるは、一時の誤なり、歌の意をよく味はへば、琴を返されたる伊勢の歌にはあるべからず。こは編者こそ明らかならね古き書には疑無き「和歌六帖」のあやまりを其儘承けたる顯昭一時の過失なり。六帖は古を徵するに用あることもある書なれども、また無下に幼き誤謬もあるものなり。かへしても、その歌を六帖には明らかに伊勢の歌と記したれども、こは中務親王の歌なり「かへしてもあかぬこゝろを添へつれば」と、かへされたる伊勢の詠出づべきにはあらず。「伊勢の集」を検するに、あづま琴の歌はもとより中務の宮の歌なり、そは顯昭のいへるが如く、長き間借りたまひて返したまはざりし故に、伊勢より返したまひねなど云ひおくりしかば、乃ちかへしたまふにつけて、かへしものゝ事に寄せて、かへしものとは思はざりけり、と返却遅延の挨拶に戯れの意を添へて歌ありしなるべし。中務の宮は即ち和漢の才優れたまひしをもて大名ありし兼明親王なり。伊勢の子を中務といふ、伊勢の集は蓋し其子の手より出づ。「拾遺集卷十七。天曆の御時、伊勢が家の集めしたりければまゐらすとて、中務しぐれつゝふりにし宿のここの葉は搔集むれど止

らざりけり。御かへし、天曆御製、むかしより名高き宿の言の葉はこのもとにこそ落ちつもありて、樹の下と子の許とをかけたる御製なり。かゝれば伊勢の集は年を経て爛脱、清訛あるべけれど信すべし。集には中務の宮のあづま琴の歌の後に記す。「かへし。程も無くかへすにまさる琴のねは人もとゞめぬみをやはづらん。又御かへし。かへしてもあかぬ心を添へつればつねより聲のまさるなるらん。かへし。常よりやそふる心のかへりけん知らぬ聲なる聲のきこゆるかゝればかへしても歌は、宮のあづま琴の御歌にかへしゝたる伊勢が程も無くの歌に、又かへしたまひたる宮の御歌なること明らかく、決して伊勢の歌にはあらず、六帖ならびに六帖の誤を承けたりとおぼしき顯昭、共に誤れること疑ふ可からず。宮の御歌は前後二首、いづれも戲謔の意あり、伊勢の歌もまた戯れのこゝろを含めるなるが、末の一首の、そふる心のかへりけむといふところに、かへすといふ語の意、顯昭が解の全く當れるを證すといふべし、かへすといふこと調を改むるといふ意義無くば、知らぬ聲なる聲の聞ゆるといふこと何の意とも知るべからざればなり。六帖をば岸本弓絃

山本明清二人の校勘註解せる功は没す可からざれども、二人とも伊勢の集に據りて誤を正さず、其儘になし置きたるは、顯昭と共に一時の僥忽なり。扱又貞享四年、芭蕉西行せんとする時の十月十一日の饞別會に、芭蕉が「旅人と吾名呼れん初時雨」の句を首として歌仙行一卷あり、其初折の裏の末、花ゆるゑに名のつく波ぞめづらしきといへる嵐雪が句に、別るゝ雁をかへす琴の手といふ魚兒が句あり。これも春の季の附句故、歸雁をかけて云へること論無く、且琴柱のならば雁に擬すること常のことなれば、それをかへすといふに、調を改め柱をなほすことを含ませて句作りしたることも論無し、琴弾く中に琴柱を動かして調を改むるは、稀ならぬことなり。されば秋湖かすかに琴かへすものは、いよゝゝ明らかに解すべく、疑ふところ無し。加之中務の宮の御住居にはいと潤き池のありて、舟を造りておろしはじめて遊びたまひけるに、法皇御覽じにおはしまして、よさりつかた歸らせたまひけることあり。時に伊勢もまたそこにありたりければ、よみて奉りける歌「古今集卷十七」に、前書ありて「水の上に乗る船の君ならばこゝぞ泊りといはましものを」とあり。野水の腔中

の消息も見透すべきならずや。芭蕉俳諧に故事を用ゐるを論じて曰く「されど其故事をいふにはあらず、其餘情のこもり侍るを意味と申すべきか」と。實に其故事をいふにはあらず、此等の句、其意を以て味はふべし。

又細考するに、琴かへす者は中務の宮の歌の辭のかへしものといへるを踏みたること論無けれども、餘りに古く耳遠きことを取出したるのみにて、冬の頃の頃にか關はること無くては、一句の意も附けの味も通るには通りても、時代と觸るゝところ無くてをかしからず。且又歴代勅選の集にも入らで、人の吟誦すると稀なる歌を用ゐたるもをかしからず。猶よく咀嚼して再考する餘地あり。顯昭の解にてかへしものゝことは釋かれたれども、袖中抄ならびに古今六帖には「かへしもの」とあり、伊勢の集には「かへすもの」とあり、かへしものと、かへすものにては、語のさま少し違ひ、考ふべきところ無きにあらず、今傳はれる伊勢の集必ずしも盡く信す可からずと雖も、六帖ならびに袖中抄も中務の宮の御歌を伊勢の返歌となせるとき誤謬あるほどなれば、かへしものとあるが眞なるか、かへすものとあるが眞なるか疑はし。これ等の事あ

るによりて再三細考し、且天和貞享頃に猶少し觸るゝ情景あるべき點を得て解したき思のするより、今一步進みて傍搜周索するに、冬の頃の頃は琴を弾く人絶えたるにはあざれど、既に少くなりて、野水などもこれに親しめりや否や覺束無し。たゞし邦人の俗、琴もことゝ云ひ、箏もことゝ云ひ、又文字にあらはす時は、七絃の琴のあづま琴も、十三絃の箏の筑紫ごとくも、琴といふ同じ字を用ゐる習なれば、琴の文字は填めありても、箏として取るべきことも本より多し。俳諧の事なれば、琴の故き事を踏まへて箏の今の事をいふも勿論あるべきことなり。故に中務の宮の琴の御歌を陰に用ゐありても、其實は箏のこと云へらんも知る可からず。琴のかへしものは、神樂を催馬樂の調に改むることなれど、轉じては調を改むることをいふこと顯昭の言に見ゆ。今の箏の調を改むることを考ふるに、平調子を雲井の調子に改むることあり、雲井を平調子に改むることあり、平調子をあげばの調子に改むることあり。平調子を雲井に改むるには、第三絃を低くし、第四絃を上げ、第八絃を低くし、第九絃を昂ぐるなり。雲井を平調子を改むるはこれを復すなり。平調子をあげばの

に改むるには、第六絃を上げ、第七絃を下げ、斗絃を上げ、爲絃を下ぐるなり。凡そ此等の調子を一度改めて、又初の調子に改むる時は、かへすとも云ふべけれども、今の言語にかへすといふことは少し。恐らくは天和貞享の頃も然らん。されども是の如くに調子を改むることを、句作りの上にかへすとも云ひて云ひ得ざることには無かるべし。別るゝ雁をかへす琴の手といへる句は、たしかに箏のこの手にして、或は雲井の調子の其名の雲井は雁に縁あれば、雲井調にかへす意を含めるかも知るべからず、又、琴柱に落つるかりがねといへる古き箏歌の意をも含めるかも知るべからず。以上の如くなれば、琴によらず、箏によらず、調子を改むることをかへすといふなりと釋するも非ならず。此外に箏などにつきて、かへすといふ言葉無きやといふに、猶二あり。一は同じ手を繰返すことなり、こは論無し。他の一は箏を彈ずるには、すべて指にはめたる箏甲を以て彼方より此方へかけて絃を撥し、または拇指をもて此方より此方へ撥するにて、皆指の自然の働きさまに准じて彈くことなるが、時には我が方へ撥したる後に、半圓もしくは波狀廻轉をなして彼方へ撫づるが如くに箏

甲をもて數絃を鳴らすことあり。然る時は、さらりんといふが如き響を發す。これを今も、かへす、とは云ふなり。拗轉の勢、掌を反して鳴らすが如きよりいふか、或は掻き鳴らしかへすより云ふ歟、又或は詳しく言ふときは、此の彈法を「波がへし」といふより略して云ふ歟、蓋し琴にも此手ぶりは存せるなるべし。例を舉げて示さば、六段の曲の第二段終りて第三段に入る時の如し、サーラリン、トントン、トントン、シャンと起る、其のサーラリンの響、即ちかへし也。又同じ曲の六段めの最終の如し、サーラリン、チャンと一曲を結ぶ、其のサーラリン、即ちかへしなり。琴と箏と、物相類すれば、法も亦相近からん。琴の彈法、擘、托、勾、踢、抹、挑、摘、打の八あり、踢、抹、挑等の指法既に存すれば、必ずや箏のかへしの如きものも亦存するならん。扱此のかへしの、曲の起るところ、終るところに在るが如きも、注意すべき事にして、若し、秋湖かすかに琴かへすものを、中務の宮の故事を踏まへたるとするにせよ、是の如き意味ある語として、かへしを其時代に用ひたりと取る時は、三日月の東はくらく鐘の聲する時、サーラリンと湖上に琴韻收まり終ると解するも一趣無きにあらず。「調子を改むる」と解するも、一曲今

や收まる」と取るも、そは中務の宮の歌を踏みたりと知られたる上の少異に過ぎねば、人の心々の取るかたに任せて悪かるまじ。

煮ることをゆるしてはぜを放ちける 杜 國

釣りたる蝦虎魚を放つなり。舊註「琴之爲言、禁也、雅之爲言、正也。言君子守正以自禁也、夫以正雅之聲、動感正實、故善心勝、邪惡禁」といへる。「風俗通」の文を引けるも宜しけれど、それまでにも及ばぬことにて、附けたる意はおのづから分明なり。琴は禁なりなど引きて解しては、次の荷兮の句、全く「觀音びらき」となりて、おもしろからず。

聲よき念佛簞を隔つる

荷 兮

一句も解を須ゐずして明らかに、前句とのかゝりも自づから知るべし。たゞし此句全くの扉なりと苛評すべきにもあらねど、輪廻の氣味あることは掩ふべからず。「琴は軽く、念佛は重し」といへる何丸の言を曲齋の駁したるは

當れり。

影うすき行燈消しに起きわびて

野 水

わびは志を失ひ力を脱して思ひわづらふが本義なるが、轉じては爲さんと欲して爲す能はず、爲さざらんを欲して爲さざる能はざるやうの、惱ましきさまを云ふに至れり。うらぶりの約なり。こゝは簞のかなたにて哀れに聲澄みて念佛するが聞ゆる夜深き折柄、影薄くして明滅する行燈の光の鬼氣人を襲ふやうなるを、寧ろ滅さんとは思へども、衾をぬけ出て起き行かんも好まじからず、徒らに躊躇すると附けたるなり。かゝる事やゝもすれば有ることにてをかしき句なり。「前句を茶毘處と見、此句を怯者の態」とする解あれど、茶毘處近く住み居て、毎夜毎夜念佛の聲に魔ゆるといふにや、解に過ぎて却て聞えぬことなり。

おもひかねつも夜の帯ひく

重 五

「萬葉集卷十四、戀ひつゝも居らむとすれどゆふま山かくれし君をおもひかねつも。同卷、水鳥の立たむよそひにいものらにもいはず來て思ひかねつも思ひかねは思ふに堪兼ぬるなり。但し思ひかねつもと止むるは、大抵は終りの句にあり。此故に、此句は古言の「つもを」つゝも」と思ひ過ちて用ゐたり、こは「たへかねつゝも」と改めて然るべしと、前人は論じたり。されど前人の其論却りて非にして、思ひかねつもと上に置くも、顛倒の法にて、惡きことにあらず、堪へかねつゝもにては、詞甚だいやしくて麗はしからず。前句を一轉して、戀の景とし、憚る人ある室の内にて、行燈も消し難く、思ひも捨て難きさま、如何にも滑稽にあはれに、ひそかに帯ひきたる、何とも云はれずをかし。

こがれ飛ぶ魂花の蔭に入る

荷 兮

「西行山家集、あくがるゝ心はさても山ざくら散りなん後ぞ身にかへりなむ」この歌を踏みて、前句の戀のをかしみを巧みに花に添へて作れるは、流石に荷兮力量ありといふべし。

その望の日を我もおなじく

芭 蕉

「山家集、願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃、西行かくて願の如くに世を終りたり。そこを取出で、その望の日と前句を承け、戀の道に我を忘れたるを、花に耽ると看做して、殊勝の願に取成したる、飽まで芭蕉は芭蕉にして、一句特立、挺然たる姿、人を啓くに足れり。しかも幹旋機轉の妙、一人劍を舞はして沛公を斬らんとすれば、一人劍を舞はして沛公を護らんとするが如く、たゞ其の劍光の燦たり爛たる間に、漢家四百年太平の祥の見はるゝが如きを覺ゆ。一卷かくして終る、いとめでたし。此卷荷兮大に振ひて、三度佳句あり、おもふに一座を睥睨するの勢ありたらん、しかも三度蕉翁に一撈せらる。まがきまでの津浪は佛喰ひたる魚に、鰭を鼓され、吳の國の笠は高尾が袖に拂はれ、花に入る魄は望の日の願に鎮めらる。おもしろしとおもしろしといふ可し。」

「しぐれの巻終」

難波津に蘆火たく家はすゝけたれど

炭うりのおのが妻こそ黒からめ

重 五

「萬葉集卷十一」難波人葦火たく屋のすゝたれどおのが妻こそ常めづらしきすゝたれどは煤びてあれどの約なり。前書の辭は此歌を少し變へて作り、句の中に「おのが妻こそ」の七字を裁入れたり。句の意は炭賣る男を見て、炭賣の顔も手足も黒きに、定めしおのが妻も黒からめ、と戯れて言へるにて、言外の餘情には、されども其を妻として愛ではごくみ、おのれも眞黒になりて世を渡るたつきにいそしみ居るならんとなり。舊解に「おのが妻こそ黒からめ、汝までが黒きは何事ぞや」と思ふ心を思はする爲に妻こそとしたり」と云へるは非なり。炭賣の黒きはもとよりなり、炭賣に汝までが黒きは何事ぞや、とは愚にもつかぬ言なり。すべて前書のある句は、よく其前書を味はふべきなり。又「おのが妻こそ黒からめやは、美しき妻にて、とこめづらならむといへるなり」と解

せるも非也。反語にはあらず、推定の辭なり、黒からめに「やは」の詞を添へて解するは、柄無きところに柄を添ふるものなり。

人の粧ひを鏡磨ぐ寒

荷 兮

此脇句の附け方、常體と少し變りておもしろし。發句はよくノ、これを味はふに、炭賣に對して別に人あること明らかなれば、其人を鏡磨の翁と思ひまうけ、さて人の粧ひを鏡磨ぐ寒とは附けたるなり。炭賣の鏡磨に對せる、一場の光景、何等の詩境ぞや、何等の畫致ぞや。鏡磨が黒熊の如くなる炭賣の男を仰ぎて瞻たる面つき、炭賣が人の爲に常に粧ひをなす磨鏡師を俯して瞰たる面つき、互に吾に對せる者に對しての批評といふほどには至らぬ批評あり、感想といふほどに至らぬ感想あるところ、實にかしく、畫もまた描き到らず、詩もまた詠じ及ばざるの機微を、たゞ俳諧連歌あつて輕々に捉へ來る。荷兮もまた愛すべきの才子なり。邵子が文よりこのかた好畫題となれる漁樵問答も思はれておもしろし。勿論此句も第三者の心に映せるところにして、炭賣

の意に「人の粧ひを鏡磨ぐ寒」と認めたるにもあらず、又前句も第三者の眼に看たるるところにして、鏡磨の胸に「炭賣のおのが妻こそ黒からめ」と浮みたりといふにもあらず、前句の一石に此脇句の一石を添へ、二石相對するに及んで其間無限の意趣を生じ、前句の一音に此脇句の一音を續ぎ、二音相續くに至つて其韻不盡の情致を發す。映對協調の妙たゞ連句に於てこそ現するものなれと云ふ可し。鏡磨の「朴の木」の炭を用ゐる縁によりて、こゝに鏡磨を點出したるりなど謂ふ勿れ。又刀劍鑑鏡の類は、寒中に研磨するを「寒磨」とし宜しとすることは知れたることなれど、さればとて其爲に「鏡とぐ寒」と置きたりともする勿れ。又此句中の鏡は即ち是炭賣の妻の鏡なりとも爲す勿れ。たゞ鏡磨の風寒き寒中、朴炭、砥粉、糞束子、柘榴、水銀壺などの間に身を置き背を屈めて、冷光やうやく發する一鏡面に俯伏するやうになり居る姿を觀得なば足るべし。

花蕨馬骨の霜に咲きかへり

杜國

花蕨は花うばらと訓むべし。いばらしやうび又は野ばらといふものゝこ

となり。蕨の花は五月を其季とす。こゝには花蕨と云ひ出でたれども、馬骨の霜に咲反りと、かへり咲の上を云へるなれば、霜をもて句の季とすること論無し。馬捨場の村はづれに在るは、有勝なる邊鄙の昔の景色なり。おのがまゝに茂れる野ばらの腐肉爛屍の肥に勢を得て、今其白骨に霜冷やかなる時、ふたゞび花を着け香を發したるも却つて荒涼なるさまを、一句いと巧みに云ひ取れり。花うばらといひ、馬骨といひ、霜といひ、配合點綴、自然にして作爲せず、當時まことに是の如きの景ありて、詩眼鋭く此を拾ひいだせるなるべし。こゝは是鏡磨のさしかゝれる路にして、前句の寒の一語、こゝに現成して十二分なりといふべし。

鶴見る窓の月かすかなり

野水

前句を幽僻の境と見做し、市鄣の賑はひ、官祿の榮にも遠ざかりたる高士が優遊自適の隠棲を附けたり。鶴は今甚だ稀なれども、もと野禽にして在々處々にこれあり。此句を「仙境に思寄せたり」といひ、林和靖の「鶴をほのめかせり」

などいへる舊解は過ぎたり。江戸の郊外なる綾瀬あたりには、明治以前は鶴居り、明治の末になりても利根川三堀の對岸には鍋鶴のあさりあるけるを夜泊の釣舟の曉に望みて吾が興じたることあり。聊かめづらしき句を見れば、やゝもすれば何の俳彼の俳といふは、實を遺れて虚を追ふの陋なり。

風吹ぬ秋の日瓶に酒無き日

芭蕉

句ぶり硬し、瓶は音讀すべし。本書に「風吹ぬ」とあるをもて「風吹かぬ」と讀む人あり、非なり。風吹かぬと斷りて、其爲に味あるにもあらず、唯是寥天に風渡りて空に雲無く、秋の日既に落ちんとして瓶をふり試みるに瓶に酒も無き寂しさのをかしみならん。秋の日は秋の晝にあらず、秋の日なり。風吹きぬ秋の日とあるを味はふべし。「後赤壁賦」客有るも酒無し、酒有るも肴無し、月白く風清し、此の良夜を如何中略適孤鶴有り、江を横ざり東より來る中略嗚呼噫々、我之を知る、疇昔の夜飛鳴して我を過ぎりし者は子に非ずや。道士顧み笑ふ。予も亦驚き悟む。戸を開きて之を視れば、其處を見ず、此句後赤壁賦のおもか

げといふにはあらず、此等の事も思ひ寄せらるゝ逸興あるなり。

荻織笠を市にふらする

羽笠

荻織り笠と讀みたき心地すれども、古より荻織る笠と讀み來れり。いづれにもせよ荻をもて織りたる笠なり。荻は蘆葦の如くにして水邊に生ふるものなり。籜笠、菅笠、檜木笠などは聞けど、荻笠といふを聞かず、されど其物織るべく編むべきに似たり、荻織笠もあるか、或は作者の一時の作意か。市は別義なし。ふらするは街らするなり、ふれ知らせて賣るを街といふ。一句は彼の兼好が阿部野に筵織りて世を渡りたる故事に因むといふほどにはあらずも、前句を風流にして貧なるさまと見て取り、荻織笠を酒に代へんとするおもむきを作れり。荻をもて秋の季となせるも、風に葉すれの音を云へるにもあらず、露ふき結ぶあはれさを云へるにもあらず、一句佳趣無く、えせ風雅にして俗意なり。荻織笠の風雅なれば風雅なるほど、これをふらするはをかしからず、祇園南海が賣花の聲などいふことを詩に用ゐるは俗なりと斥けしことさへ

思はれて厭ふべし。

加茂川や胡麻千代祭微近み

荷 兮

京都に在りし日「胡麻千代祭」の事を加茂のあたりに問糺したれど、知れる人に遇はざりき。今既に絶えたるならん。舊註に曰く「上加茂の川上に稻荷あり、神胡麻を好みたまふよし云傳へ、因つて其祭を胡麻千代祭といふ、九月上旬の午の日祭典あり」と。微は「や」と訓むべし。祭に新らしき笠冠るは常の事なれば、笠賣といふにつけて、其時節を云ひたるなるべく、花笠菅笠などいふ常體のものならで、萩織笠といへるに、京をはづれて名も鄙びたる胡麻千代祭のめづらかなるを特に取出したるが作者の意匠なるべし。されど此句も一章特立の効無く、詩趣貧弱なり。

岩倉の聳なつかしの頃

重 五

岩倉は北岩倉村なり。祭も近くなりぬ、祭には聳も來るべし、おもてを對は

さぬもやゝ久しくなりぬと、其舅姑の心待するさまなり。

思ふこと布搗歌に笑はれて

野 水

布搗歌は布を搗きつゝ唱ふ歌なり。此一句おのづから二様に聞ゆ。一はおもふことを我知らず布搗歌に唱ひ出して「御身の上を託ちたまふか」と、友だちに打笑はるゝとなり。關更曲齋等はかく解したり。一は心におもへることを人の布搗歌に打諷し笑はるゝとなり。浪花の升六はかく解したり。兩解とり「に」をかし。布搗歌粉挽歌などいふもの、いづれも戀の意を含めるが多ければ、それは「御身の上」と親しき間の友達の揶揄するといふも有るべきことなり、又「これは御身の上」と云はぬばかりに歌ひて顔赤めさするといふも有るべきことなり。されどこれは「吾が人知れず思ふことを、人も心無くして歌ふ布搗歌の文句に笑ひ興せられて」といふまでにて、其人々の笑ひも、思有る身には冷りとする娘心のかすかなるところを云取りたるなり。布搗く歌と讀む時は、布つき歌と讀むとは、味おのづから變るべし。曲齋は布搗く歌と讀

めるなり。布つき歌と讀みたし。「粉挽歌」絲線歌の類、一々其時に臨みて作るものにもあらず、誰が作れるとも無く作り出されありて、それを唱ふものなり。前句とのかゝりは、前句を親々の約束したる岩倉の吾が行末の夫をやうやくなつかしがるほどの年頃になりし娘と見なしたること言ふまでもなし。

うきははたちを越ゆる三平

杜 國

三平はまるがほと讀み來れり。三平とは額と鼻と腮と三處平らかなるをいひ、二滿とは兩頬のふくらかなるを云ひ、三平二滿とつゞけて美しからぬ女をいふとなすこと、古來の俗説なり。されど其の據るところを知らず、僧一休の説なりなど云へりと雖も、甚だ笑ふべし。これは山谷が詩の句にはあらず。句ありなど云へりと雖も、甚だ笑ふべし。これは山谷が詩の句にはあらず。「山谷集卷下四休居士詩の序」に、大醫孫君昉、字は景初、自ら四休居士と號す。山谷其説を問ふ。四休笑ひて曰く、麤茶淡飯も飽けば即ち休す、破を補ひ寒を遮る暖なれば即ち休す、三平二滿も過れば即ち休す、食らず妬ます老いぬれば即

山谷集卷下四休居士詩の序に、大醫孫君昉、字は景初、自ら四休居士と號す。山谷其説を問ふ。四休笑ひて曰く、麤茶淡飯も飽けば即ち休す、破を補ひ寒を遮る暖なれば即ち休す、三平二滿も過れば即ち休す、食らず妬ます老いぬれば即

ち休す」とあり。孫君昉の語なること明らかなり。こゝに三平二滿といへるが不美の婦のことなりや否や疑はしかれど、之を不美の婦とすれば、過れば即ち休すとは、妻となして娶りぬればそれまでにて済むといふことなるべし。山谷集は足利氏の頃、僧徒の間に大に愛誦されたるものなれば、一休「三平二滿」を釋したりなどいふ俗傳も生じたるならんか。一説に曰く、曆に建除滿平定、執破危成收開閉等の語を註して、其日の事を處するに吉を用ゐる凶を避けしむ。(建除等の説は「七佛神呪經」に出づ)三平二滿は一月の中、平の日三、滿の日二あることにて、平滿いづれも吉を得べきの日なり」と。是の如くなれば利福を得べきの日も過ぐれば則ち休すといふなり。四休の言を考ふるに、第一句食をいひ、第二句衣をいふ、第三句色をいひ、第四句壽をいひ、人間少欲知足の可を説きて塵念を蟬脱するものゝ如し。滿平曆日の説、却て妙ならざるに似たり。但し不美の婦を表する三平二滿の語の出づる處を思ひ得ず。然れどもこゝに三平とあるは、三平二滿の下略にして、容貌の不美をいへること論無し。たゞ三平は平顔と訓まむかた當るべく、又圓顔は必ずしも不美ならざれど、當時の

俗爪核顔を尙みて圓顔を好しとせざりしより、圓顔とは訓みしなるべく、相傳の訓とおぼしければ今の意を以て古來の訓を改むべからず。扱一句の上はおのづから分明にして解を須たす。十七八歳を以て嫁時となしたる世に二十にして嫁すといへる禮記の定めにもおくれたるを嘸かし、憂くも辛くもあらんと、縁遠き女の物思ひするを、世態人情を知悉せる人の同情するなり。前句を人々に笑はれてと取りたるはもとよりなり。

捨てられてくねるか鴛鴦の離れ鳥 羽 笠

捨てられては友鳥に離れ去られてなり。くねるは「枕草紙」に「くねくねしう恨むる」など見えたるにて知るべく、古今集序にも「女郎花の一時をくねる」など云へり。中古の文には「くねり腹立ち」と續け用ゐたるあり。前句の女の離れ鳥を看て物思ふさまを附けたり。圓成すべき縁談の破れたるを底の意に見せて、冬季の水禽の景をあらはしたるは、岩倉の堀以下人情の句のみなるを轉じて宜し。「新古今集卷六、藤原雅經」はかなしやさても幾夜か行く水に數かき

わぶる鴛鴦の獨寢。此歌などをこそ思ひ寄すべけれ、黃華庵が「萬葉集卷三、紀皇女御歌、輕の池のうらわゆきめぐる鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに」を引けるはつたなし。

火おかぬ火燧なき人を見む 芭 蕉

鴛鴦は情深き禽なり、野鴨の浮薄なるには似ず、故に詩にも定め無き語らひを野鴨にたとへ、伉儷の間濃やかなるを鴛鴦に比ぶること常なり。前句「捨てられて」とあるを、死にあらずんば離れざる禽故、こゝには無常と取りて「亡き人を見ん」とは作れり。前に引ける雅經の歌の如きも「はかなしや」の初五文字味はふべし。扱火おかぬ火燧は火の消えて無きにはあらず、火を置かぬなり。闌更が「炬燵に打臥し、夢にもがなと戀焦るゝならん」といへるは過ぎたり。火置かぬ炬燵に打臥すべきや如何。これは睦ましき妹背の中あたゝかなりしも、定業是非なく、幽明途隔たりて、昨日までは差對ひの相合炬燵に冬の夜の寒きにも一味の春ゆたけく暮したりしも、今は其人既に亡せて其物猶存し、舊物

眼に入るにつれて、深感の胸に添はるところを云へるなり。あの炬燵の對ふ坐に居たまひし人はと、すさまじき火おかぬ炬燵の彼方にまざくと其人を看る心地して、又今更に此世にては遇ふべくもあらぬ人を見たき念の起るところを、如實靈活に描きたる一句、人をして涙を墮さしむるに足るものあり。「枕の草紙」すさまじきもの、火おこさぬ火桶、すびつとあり。「火おかぬ炬燵」の七字はこれに本づきたること明らかにして、「亡き人を見む」の七字は芭蕉の微妙の運用なるに、舊註皆この事を指示せざるは何ぞや。前句とのかゝり説かずして知るべし。

門守の翁に紙衣かりて寝る

重五

「亡き人を見むと焦れつゝ狂女の狂ひつかれて門守が情に臥すならん」と關更が解せるはいかゞ。「紙衣かりて寝る」にては、心たしかにて狂女ともおもはれず「紙衣させられて」とか「かけられて」とかあらば、其解もよろしかるべし。「親にもあれ主にもあれ、それを失ひて今は己が身一つの置處さへ無く、いさゝか

の由縁を求めて番人の門守に勞はられ居る體なり」といふ升六が解もいかゞ。「番人の門守」といふはいづかたの門守といふことぞ。いさゝかの由縁を求めてといふも心得がたし。又「町の門小屋の炬燵も消えし夜半に、酒機嫌の遊蕩兒の遊び過して家へ歸りかね、門番の翁を頼みて一夜を明さんとするに火の無き炬燵のいと冷やかなれば、若や死人が入つては居ぬか、見むなど戲言いひて、翁が紙衣借りて寝るなり」といへる曲齋が例の「戲言三昧」にて捌く解はいよゝゝ非なり。曲齋やゝもすれば人を咎めて「真顔」なりとし、詞の曲節を實體に解誤りたるを非とす。曲節といふ語は手づまといふことにはあらず。草體の作なりとて、曲齋の言の如くに、たゞ三十六句歌仙行の中、さのみ戲言のみ多からむや。曲齋の言に従へば「初雪の卷」の如きは、口をしと瘤をちぎる力無きも戲言なり、月は遅かれ牡丹盜人の句も戲言なり、篠深く梢は柿の蒂さびしの句も、前句の「驚起きよ」の句を戲言としての附句なり、道すがら美濃で打ちける碁を忘るも、今宵は化をあらはして飲まむといふ戲意なり、一つの傘の下こそりさすも「百貫のかたに傘一本」と戲言するなり、蓮池に鷺の子遊ぶ夕間暮も、樂

は苦の種」と笑語するなりといふ。一卷の中、いかで然ばかり戲言洒落笑語あだ口の多きことぞや。曲齋が美濃派輕浮の弊を承け居れるは掩ふ可からず。此の「門守」の句、前句を「火無き炬燵を覗きて、若や死人が入つては居ぬか見む」といふあだ口云ひたりと見立て、此句ありといひ、他の解を罵りて「洒落も手づまも會せざる眞顔なり」といへるは、正に自己の病處弊處を暴露し、後人をして曲齋に疑訝の眼を向けしむる所以なり。炬燵冷えたりとて死人の在る有らんことを思ふものあらんや。此句は麥水の解甚だよし。曰く「空屋の體なり」と。まことに然なり。修行か仕官かなど何かの所以有りて永く遠國に在りし男の歸來りて叔父か叔母かを訪へるに、一家繁昌してあらんと思ひのほか、其家既に死絶えて、家財は土藏に、家は五人組の預かりとなりて、たゞ老いたる小作人などの長屋門守りて暮し居たるに、何事も明日の事と、是非なく其夜は紙衣かりて、火おかぬ炬燵に亡き人を思ひ寝に寝るなり。田舎の然るべき家には長屋門多く、又其門に其家の従僕若くは小作人など住ひ居りて家を守護することも多きものなり。「門守の翁」といひたるところに、町の番小屋の老

夫などゝは思はれぬさま見ゆ。町の木戸をあづかるも門守には相違無けれども「門守」といひ「翁」といへる、共同の町の木戸を預かるものにはあらで、儼たる一郭一戸を護れる如く見え、其人も門番を業とせるものにはあらぬやう聞ゆ。此句の解、曲齋には與し難し、麥水には與すべし。

血刀かくす月のくらきに

荷 兮

一句明らかにして解を要せず。前句とのかゝりも亦おのづから明らかなり。家中の若者などか、徒士若黨の類なるべし、と舊註の云へるはよろし。

霧下りて本郷の鐘七つ聞く

杜 國

例の荷兮が演劇ぶりの案じ方の句を承けて、此句もまた演劇めきたり。七つといへば曉近き頃なり。霧下りては、曲齋おもへらく「霧下りてとある不の字の左畫缺けて下りてとなりたるならん」と。霧、雨、雪などは、其降るを「下りる」といひ、止むを「上る」とも云へば、下りてにても通せざるにあらず。本郷は今般

賑の地なれども、貞享の頃は武家の邸寺など多くて、淋しき處なりし故此句あり。「本郷もかねやすまでは江戸の内などいふ柳風の句あり。それも此句よりは後の事にして「かねやすは名高き商家、ゆうげんなり、今猶存す。「かねやすより北西などは江戸の内ならずとなす、其の淋しかりしこと知るべきなり。

冬まつ納豆たゝくなるべし

野水

納豆は數種あり。「唐納豆は南都に始まる、弘福寺東大寺等これを出す。「濱名納豆」は濱名に始まる、太福寺摩伽耶寺等これを造る。今の俗にたゞ納豆といふものは、絲ひき納豆または味噌納豆といふものなり。納豆は是の如く本は僧家に出づるを以て、寺院より檀越への餽り物に納豆を用ゐること多く、歳暮などには定まりたる式の如くに拵捲ツグミに納れて贈りたるなり。前句に本郷とあるより、其あたりの寺院多き景を捉へて「冬待つ」の一語に秋季を存して、納豆たゞく風情をいへるなり。たゞくとは、味噌納豆は用ゐる時にこれを叩き判みて、蕪菁の葉及び豆腐を加へ、汁に煮て其後に芥子を放つこと常なれば

なり。今これを納豆汁といふも、元來味噌として用ゐるもの故に味噌納豆の名あるなり。納豆汁も今は摺りて造る家多かれども、本來は叩きて造るなり。納豆は如是して用ゐるが常なれど、時に臨みて叩き判むは容易ならねば、預め叩き判みて、薄平たく方形に拵へ置く。これをたゞき納豆といふ。故に人倫訓蒙圖繪にも、たゞき納豆の稱見え、賣品にさへもありたること知らる。たゞし春夏温熱の時は納豆變味し易ければ、九月末より二月頃までを其季とす。たゞき納豆ならぬは、粒納豆といひしこと、林屋正藏が戯話の書に見ゆ。今人苞入りとなりたる納豆を其儘醬油にて喰ふに慣れて、昔の扱ひを知らざる故に解しわづらふのみ。別に難義ある句にはあらず。一句は軽くして、納豆の芥子のよくきゝたり。

花に泣櫻の微と捨にける

芭蕉

此句舊解紛々たり。「花に泣」は「花の跡」の誤なりとする者は曲齊なり。「櫻の微」を「櫻の懲」の誤なりとする者は何丸なり。泣か跡か、微か懲か、芭蕉を泉下よ

り起さずんば定むる能はざるに似たり。且又「泣」とすれば「泣きか」「泣くか」「決し難きものあり。」「微」とするも「微とか」「微をか、これも亦考ふべきあり。」「此句甚だむづかしく解きがたし」と云へる黄華庵の言は、人をして其正直なるを愛せしむ。先づ第一に「櫻の懲」といふは何ぞや「櫻の懲」「月の懲」などいひて語を成すと思へるやらん、呆るゝのほか無し「紅葉に懲りず」といひし句はあれども、櫻の懲、松の懲などいひては全く語をなさず、又「懲を捨つる」とは何とするにぞや、これも語をなさず。芭蕉豈語をなさざるの語を用ゐて句を作らんや。懲を凝の義に取りたるも、同聲異義の訓を判たざるの陋なり。此故に櫻の懲とするの説は破るを須たすしておのづから敗る。多く論ずるを要せざるなり。「花の跡櫻の徴を捨にける」として解するは、解は則ち容易なれども、花の跡の語もおもしろからず、花のあとならば「花の後」と文字を措くべきところなり。曲齋やゝもすれば再板多訛の説を立て、本文を改めんとし、又時に語格の論を設けて本文を改めんとし、又時に自家の見によりて本文を改めんとするの癖あり。自ら信ずるはよし、自ら用ゐるは過ぎたり。是に於て人却て曲齋を信

せんと欲して信ずる能はざるの感を發せざる能はず。花の跡の説もまた然り。「花の跡櫻の徴を捨にける」にては、初五文字は中七字と同じことを云へるやうにて、平凡釋弱といふまでにはあらねど、妙處無き言なり。今の本に傳寫刊刻の誤無しとはいふべからず、然れども確徵精議動かす可からざるものあるにあらずして、我が解を下す能はざるより口を譌訛に籍りて、本文まさには是の如くなるべし、と改めんとするは妄なり。此句は秋三句續きたる後の句にて、しかも初裏の十一句目に當り、こゝまでに花の句無ければ、同じくは花を出したきところなるに、前句は「冬まつ納豆たしくなるべし」と憚り氣も無く言放ちあるなり。凡そ前句明白なる秋の季にして花を出さんことは易からぬわざなり。「春の日に、月無き浪に重石おく橋」といふ初裏十句目の羽笠の句あり。これは秋なれども、月は秋と限りたるものにもあらず、故に野水は「轉びたる木の根に花の鮎とらん」と附けたり。これ附け易きところなり。「同じ集」に「別れの月に涙あらはせ」といへる荷分が句に「跡ぞ花四の宮よりは唐輪にて」と且藁の附けたるも、前句月なれば、春に轉ずるに難きこと無きなり。「曠野に、袖ぞ露

けき嵯峨の法輪といへる釣雪の句に「時々」に物さへ喰はぬ花の春と昌碧が附けたるも「露けき袖」の秋とのみ限らねば「花の春」をも「物さへ喰はぬ」といふに前句と響き協はせて附け得たり。「炭俵」の露を相手に居合ひとぬきといへる芭蕉の句に「町衆のつらりと酔ひて花の陰」と野坡の附けたるも然り。「同集」鴨まつくろに「来て遊ぶなり」といへる桃隣が句に「人の物負はねば樂な花ごころ」と野坡の附けたるは「花ごころ」といへる言葉によりて辛くも逃げたり。「續猿蓑」の「水際光る濱の小鯛」といへる惟然が句に見て過ぐる紀三井は花の咲かゝりと芭蕉の附けたるは「鯛は秋の物なれども春もまた全く居らぬにあらねば、水邊遠からぬ紀三井寺を附けて、前句を和歌の浦としたる、實景の點綴、驚くべき化工の手なり。「有明高う明けはつる空、露に朽ちけむ一腰の錆などいふ句には其後へ花を付けむこと然まで難かるべからず。但冬まつ納豆の後に花を附けむことはまことに易からず。「ひさご」の木の下巻初裏十句目に前句秋なれば芭蕉雁ゆくかたや白子若松と秋の季の句して、扱花を附けしむ。珍碩すなはち千部讀む花のさかりの一身田の佳句あり。然れども細かに味はふ

に、雁は秋より春まで居るものなれば、芭蕉「雁ゆく方」と心ありて辭を措く。是に於て珍碩も逸才なれば、心得たりと「春の雁」と取做し、千部讀む花のさかりとは打出して、後人をして拍手して妙を叫ばしめ、勢に乗じて曲水も順禮死ぬる道の陽炎と奇功を收めたるなり。是皆芭蕉が鼓舞振作の靈手の作用によれり。野水が納豆は芭蕉の雁には比すべくもあらず、冬待つなど、敲きたてたれば、後の註解者等おのれ先づ附くべきところをも思ひ得ぬものから、附き居る芭蕉の句をすら、或は字を改め語を換へて解しゆがむるに及べり。されども芭蕉の句は本來多く婉雅平正にして、峭崛奇僻ならず、これを吟味すること幾回なる時は大抵は人おのづから解すべし。此句を解せざる如きも、句の晦澁なるにあらず、又た々誦詠咀嚼の足らざるに因るのみ。前句は「なるべし」といへる手爾波によりて、ことごとくといふ物の音を、此方より「冬まつ納豆をたき判むならんと推測したるなること分明なり。この「冬まつ」の語を味はへば、芭蕉の句の附肌はおのづから分明にて、即ち、此方にも「秋やうやく末になりたれば、舊衣を引出し、肩裾や、寒き朝夕の備へせんとなし居る折柄、納豆たきく

音を聞きて、冬まつとは推測りたる趣なり。扱「花に泣き」とは、一句の髓腦にして、舊衣を引出し見たるに、いづくよりとも無く花片のすがれたるがひらくとこぼれたりければ、三春の艶光今たゞ是の如し、蝶影禽聲も一時の夢となりて、青帝の芳姿も消えて痕なし、日月疾く過ぎて我もまた老いとす、香魄返らず此花を如何にせんと歎ずるなり。「花に泣」といひては一句も前後も聞えずと曲齋の説けるは妄なり。花に泣とありてこそ正に枯花零英に對する端の情はあらはるれ「花の跡」など生ぬるけたる語を置きて何の妙かあらん。次に「櫻の徴と捨てにける」は、一旦枯花に對して心動き感逼りて涙をも躑さんとしたるが、さて此のものを如何すべくも無し、思へば執着の甲斐無きことなり、花ちやとて手折れば薪散れば塵、浮世の果が何になる、觀すれば色空空色、櫻樹をくだきて觀れば花も無し風こそ春の色はもたらしたれ「花も櫻の徴ちや」までと、其花を捨てたるなり。納豆たゞける音の響に徴といふ言葉の來れるは論無し。されば「花に泣き櫻の徴と捨てにける」と文字ならでは聞えず。廻護映彰の文法、本よりまさには是の如くならざる可からざるなり「花の跡櫻の

徴を捨てにける」にては「花の跡」と「櫻の徴」と重語になりてをかしからず、然らずば「花の跡」といふこと、四月五月頃のことのやう聞え、又「櫻の徴」にては「櫻の徴」といふもの有るか、さらば「櫻の徴」といふ語の古より存せるかに聞え、一句も何のおもしろきこと無し。杜甫の句の「感時花濺淚」とは聊か異なれども「花に泣き」といふにて、前句よりの續きある故に、枯花に感じたりとは知られ「櫻の徴」と文字有る故に其處に觀念の働けること知られ、かくして一句成立するなり。再三吟誦すべし、前句との附肌ならびに一句の情、手爾波の靈妙によりて、おのづから融會するを得べし。

僧ものいはず款冬をのむ

羽 笠

前句を晚春山院のこととして此句あり。款冬は字に依りて論すれば、藜又は藜吾の類にして、其花出でんとして未だ出でず苞中に在るもの、俗に「ふきのとう」といふもの、採りて薬とすべし、温肺治嗽の功あり。これに因りて「款冬をのむ」を解して、薬を服するなりと爲すものあり。薬を服するに「ものいふ」もの

有らんや。果して薬を服するならば、もの言はずの五字を置くこと、愚甚しく陋甚し。又款冬の二字、邦俗讀みて「やまぶき」と爲す。蓋し初は山藨、即ち「つはぶき」のことを云へるなり。後に至りて黄色花を着くるところの灌木、即ち「七重八重花は咲けども山ぶきのみのひとつだに無きぞかなしき」と兼明親王の詠みたまひしものをも款冬と爲し、金棣棠花と款冬と相淆るに及べり。されど此淆亂は既に久しくして、公任卿の「和漢朗詠集」にも、款冬を藤やまぶきと並べいふ美しき花のやまぶきとして用ゐられたり。されば此句中の款冬をやまぶきと取らんは許すべきふしあり、強ちに咎むべきならず。但「やまぶきをのむ」としては通じ難きを以て、或は「山吹の花の下ゆく水をのむなり」「花の露を飲むなり」など、釋し、或は「山吹は茶の銘なり、山ぶきを飲むは即ち茶を飲むなり」など、釋す。山吹といひて茶の事とすることは論無けれども、こゝを茶と解しては「打越」に納豆あれば「飲食の類」を出すべきにあらず、且「又春の季を失ふなり。必ず茶をいふにはあるべからず。山吹の露を飲み、下行く水を飲むなり」といふも苦しき解なり。然までに云はんほどならば山吹の花を呑むなり

と解かんかた寧ろ苦しからざるべし、月を握り風を擔ひ花を呑み酒に臥すと
いふ語は「雲仙雜記」にも見えて、おもしろき言葉づかひの例にも引かるゝこと
なればなり。かく舊解は皆肯ひ難しと雖も、款冬は畢竟やまぶきと訓むべし、
「ものいはず」といふ語のつゞきあれば、藥物の款冬として讀みては通せず。や
まぶきに「ものいはず」と云ふ事の續く所以は、舊解に良峯宗貞の事よりとす。
曰く、良峯宗貞色を好むこと無雙なり。帝これを試みんとして、山吹色の衣を
被き、婦人を装ひて簾中におはす。宗貞これを見て、とかく申せども答無し。
よりて「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」と吟す。爾時
帝龍顔をあからさまに現はしたまふ。宗貞恐懼して已ます。帝罪したまは
す。宗貞此歌を子の素性に與ふ。これより山吹を言はぬと詠みならはせり。
「定家卿難題百首橋下款冬、橋柱色に出でけん言葉を言はでぞ匂ふ山吹の花」云
々。此事妄談なること明らかにして、宗貞の情に深き人なりしことは、五條わ
たりにて雨やどりしたる荒れたる家の女の、むしものにしたる庭の菘に梅の
花枝を箸にして呉れたるを、萬づの山海のものにも超えてめでたかりきと、長

く思ひ出でしといふ物語にても知らるゝことなるが、彼が歌の其の「霜雪のふるやが下にひとり寝のうつぶしぞめの麻の袈裟を着初めたるは、仁明天皇崩御ありし宗貞十八の年なり、子の素性に山吹の歌を與ふるにも與へざるにも當時素性何歳にかなり居たらん、笑ふべき妄傳なり。されど中古以來云傳へたることゝおぼしくて、一條禪閣が「歌林良材」の體にならひて何人かの編みたる「連集良材」に此事見えたり。山吹の歌に然る事有りて、それより山吹を言はぬ色といふにはあらず、歌の本文に見ゆる通り、山吹色の衣は「くちなし」もて染むる故に、問へど答へずとは云ひたるにて、即ち是誹諧戲謔なるが、此歌勅選最初「古今集」に載せられて人の知るところとなりたるより、山吹に言はぬと云ふことを縁にするやうなりたるなり。「虚栗」に、藤匂子が句「山吹や無言禪師がすて衣」とあるも、亦たゞそれまでなり。此句の前句は花を櫻の徴と取捨つるさま故、無言無爲寂寞湛然たる修行の僧を付けたるにて、僧ものいはずと云ひ「款冬を」といひ「吞む」と作りたる、たゞ是俳諧にして別にむづかしき義なし。「のむ」といふ語、飲は吸ひすゝりてなり、嚙は一口づゝのむなり、嚙下は然して咽を

通すなり、吞は生吞活剝又は吞噬などゝ續く字にて、まるのみにするなり、吞牛吞舟などいふも牛舟をまるごと口に入れんといふなり、故に吞は包容の義ありて「雲夢の若き者八九を吞む」などゝ云ひ、含の義なり容なりといふに通ず、凡そ此等の飲も嚙も吞も、皆のむといふ一語に攝せらる。しかのみならず、のむといふ語は、猶又了會首肯の義、懷藏の義、私取の義をも有し、嘗むといふ語と通ず。又和漢ともに内に攝して外に發せざるをも「のむ」といふ。「聲を吞む」といふが如し。是の如きの種々の義ありと雖も、こゝに吞むといへるは、懷藏の義に近し。「匕首を吞む」といへば、匕首を藏するなり。款冬は即ちくちなしの縁あることは古今集以來人の知り古したることなれば、無言の行を身に保持し心に執りいだけるをば、言葉を綾にして諧談に「山吹を吞む」とは云へるにて、僧の眼の往くところに水流れ山吹咲けるは言はで知るべきなり。「ものいはず」は外に既に現はれたるところ、而して内に猶「飽まで無言ならん」との意を抱ける有るを、草堂眼前の景に縁りて「款冬を吞む」とは云へるにて、重言にはあらず、をかしき言ひかたなり。別に深義あるにはあらず。前句「花に泣櫻の徴」と同

じやうなることを云へる故、こゝにも其調を承けて、ものいはず山吹と同じやうなることを云ひて、共に巧なる曲折を見せたり。其角が鶴さもあれ顔淵生きて千々の春と云へば、嵐雪が身の正月を屈原の醉と承けたる如く、其角が日や月や西瓜に劍をかなでけると云へば、藤句子が弓張さげ野に芋を射ると承けたる如く、前句の「拍子調子」を承けておもしろき働きするは、連句に多き例なり。花に泣きて舊迷を捨て、山吹に對して無言を行す、詩僧かあらぬか悟れるや悟らざるや、春風細草に渡りて、香煙麻衣に纏はる、おもしろき情景ならずとせず。

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ

荷 兮

山吹の下ゆく水、未だ塵寰に出でねば、永き日を清く流れて、長松の梢吹く風ゆるく仙境を渡れば、春の谷暖かに蒸し、仙禽丹霞に出没して去つて又來り、素羽玉泉に洗浴して照りて耀かんと欲する景を云へり。彼の牛頭山に籠りて百鳥花を銜みて至りし融禪師が石室の前なんどのやうなる趣なるべし。

宣旨かしこく釵を鑄る

重 五

「宣旨」とは任官の勅を上卿より外記に下知するをいふ。外記其旨を書するときは即ち諭旨たり。何氏の女を召さるべき由の勅ありて、官員其用たるべき釵を工人に命じて鑄造るなり。前句の白燕にかゝる。「山に白燕を見れば其君貴女を得るに宜し」と易占に見ゆといふ。類書に「西京雜記」を引いて曰く、「元后家に在るとき、嘗て白燕あり、白石の大き指の如きを銜みて、後の續篋の中に墜す、后之を取れば、石自から割けて二と爲る、中に文有りて曰く、天地に母たらんと、后乃ち之を合すに、遂に復還つて合す、後に皇后と爲り、璽筒の中に置く、謂ふらく天璽たるなり」と。此文今傳ふるところの「西京雜記」に見えず。明の黃省曾謂へらく「西京雜記」今の傳ふるところは且其半を失ふ、又葛洪の故簡に非ず」と。然らば則ち元后白燕の事は今の雜記の佚するところに在りて、類書相承けて偶存せるものならん。又「洞冥記」に曰く「漢武帝元鼎元年招仙閣を起す、神女有り、一玉釵を留む、帝以て婕妤に賜ふ、昭帝の時に至りて、宮人猶此釵を

見る、黃誦之を欲す、明日匣を發くに、白燕有り、飛びて天に升る、宮人學んで此釵を作る、因つて玉燕釵と名づく、言ふこゝろは吉祥なるなりと也と。白燕と釵との傳説是の如きことあり。是の如きこと無くとも、釵に愛好すべき禽形を賦することは稀ならぬことにして、爵釵は雀、鴛釵は鴛、鳳釵は鳳、皆各其形によりて名を得、燕釵ももとより自づから稀ならねば、温庭筠の詩の句にも、燕釵拖頸拋盤雲、など作り、遊僊窟にも、黃龍透入黃金釧、白燕飛來白玉釵の句有り。多く言ふにあたらざるなり。たゞ天子の婦人に釵を賜ふことは、漢土に、其例あること、見えて、晋書卷六元帝紀の、帝の簡儉冲素なることを記せる條に、帝將に貴人を拜せんとす、有司雀釵を市はんことを請ふ、帝煩費を以て許さず、幸する所の鄭夫人、衣に文綵無し、など見えたり。おもふに玉雀釵何ほどのこと有らん、簡儉もまた過ぎたりといふべし。こゝには鑄るとあれば、玉釵を造るにはあらず、白金をもて貴人に拜せらるゝの女に賜はらんとするの釵を鑄るにて、其釵の燕の型より出で、水に洗はるゝところとなし、前句の全く景色なるをば、思ひも寄らぬ事に轉じて、濁らぬ水に羽を洗はせたるなり。かゝる鑄物を

は蠟に松脂を合せたるものにて原形を造る。これを蠟型といふ。蠟型を沙土にて包み、熱して蠟を去り、沙土の雌型を得、それに熔けたる金銀等を注ぎ、扱其型のまゝを水中に入れ、型を破りて鑄上りたるものを出し、扱それを洗ひて、最初の意匠通りに鑄上りたるや否やを檢め視るなり。白燕濁らぬ水に羽を洗ひの句を、その景色に取做して、宣旨かしく釵を鑄るとしたる、重五が此の一轉甚だ驚くべく、鑄物と職は少しく異なれども、一座の中の金屬細工の工人たる杜國も瞠目したるなるべし。「白燕飛來るの瑞を見て丹誠を抽で釵を作る」といふ解あれども、白燕は稀有なるものにて、まして鑄物場に來らんことなど、想ひもつかず、前句を轉じたる附句を、強ひて實にして解せんとしたるより、甚だ窮したりといふべし。

八十年を三ツ見る童母持ちて

野水

八十年はたゞ多き月日をいふまでなり。二百四十歳など、算するにも當らずして、八十年を三ツ見るといへるも、甚だ長命高壽といふまでのことなり。

それを「童」といひ「其母あり」といへるも、面白く言へるのみにして、別に故事出典などあるにあらず。「狂言」には「五百八十年」と祝し、唐詩には「白髮三千丈」と愁ふるも、其數に何の意義あるにあらず、たゞ其の永きこと長きことを言はんまでのことなり。八十を三つ見るは、七十三歳のことなりなどいへるは強辯曲解ならん。鶯笠が「法然上人の説」として雜事を註記したる書に曰く、大和國竹林の巖上に於て勅して神武帝の玉釵を鑄る、諸國に勅したまひて百歳以上の男子の親を存するものを召集めてこれに役せしむ、是玉冠を鑄るの例なり、竹林巖は極めて靈地なればなり、我こゝに佛舎を開かむことを欲す云々と云へるを舉げて解したるは信じ難し。法然上人の説を集めたる書といふもの疑はし。假令其書ありとも、上人は西方淨土の尊者たり、東方神州の史家にはあらず。白燕の句に「倭姫」の事を附會し、此句に「神武帝」の事を附會したる「大鏡」の説は、あしもと蹊躑として自ら行く能はざるの觀あり。此句は前句を宮廷に吉慶あることと取りて、慶典あるごとに高齡の者に賜賚あることは、盛朝の佳例なれば、こゝにたゞ常ならずめでたき民あることを、誇張の限りを盡して言へるま

でにて、八十年を三つ見ると云ひ出せるも、八十歳より以上の者に嘉祝あること定式なれば、それに因て更に三つ見るとは作れるなり。これなどこそ輕き會釋に止まりたる句ともいふべし。想ひ見よ、此等の句ならずして「宣旨かしこく」の句に如何様の句を附け得べきかを。

なかたちちそむる七夕の妻

杜 國

「七夕」は當に「七日の夜」と訓むべきなり。決して「たなばた」と訓むべきにはあらず。然れども七月七夕に當りて「たなばたつめ」と「彦星」との相逢ふといひ、漢土の俗の此の夜に於て乞巧の祭をなすことを承け傳へて、此方にも星を祭るに至り、それよりして「織女星」を「棚機つめ」といひ、轉じては「新古今集」頃より七夕をたなばたと訓むやうになれり。こゝに七夕とあるもたなばたと訓まぜんとしたるなること論無し。舊解區々たり。關更曰く「織女は天帝の娘なり、河西の牽牛を夫とす、それより織ることもせず、父母をも疎くなしければ、天帝怒りて中を避け、天の川を隔て七月七日一夜相逢ふことを許したまふ」と古文前

集に見え侍る、是中を斷初むるならん、前句に違ひづけの句なり」と。「違附」といふ附方はあれども、是の如くにては前句とのかゝり餘りに交渉無く、一句もふつゝかなり。升六は曰く「前句の童を扱は天人なるべしと見て、七夕の妻を仲人すると附けたり」と。「七夕の妻」といふこと心得難し。たなばだつめは女なり、其妻とは何ぞや。彦星即ち牽牛星に織女星を天人の仲人するといふにや。さらば「彦星の妻」とあるべし。一とわたり的事さへ更に聞えざるなり。又一説を擧げて曰く「前句の童に七夕の頃仲人して妻を迎へしめたるなり」と。然らば逢瀬甚だ疎き七夕と限りたるはいぶかし。「媒ちそむる文月の妻」とか何とか、同じ秋を用ゐるにしても言葉の綾あるべし。「師走の嫁取り」といふ諺は聞きたれど「七夕の嫁むかへ甚だ奇に過ぎたり。芝山は曰く「七夕の妻荒淫なれば、それをとめて年に一夜許しけるを、中隔ち初むるの略にて、なかたちそむると作れるなり」と。是關更の説を承けて少しく改めたるのみ。曲齊は曰く「棚機妻は上古機織る女の通稱なり、前句の人の長壽にあやかりたくて媒妁を頼みければ、我は媒妁するは初めてなれども貴意に任せんとて媒妁しかく

る様なり」と。されど「棚機妻」といふ語は無く「棚機つ女也。「倭名鈔」に織女をかく訓せり。機の低きを「しもばた」といふ、腰機「これなり、やゝ高くして棚をなせるを「棚機」といふ。アイヌは「しも機」のみなれど、我には神代より「棚機」あり、棚機を織るもの即ち「棚機つめ」なり。「棚機姫の神、神衣を織りたまふ」ことは「古語拾遺」に見ゆれど、棚機妻といふは斷じて無し。「たなばたのつまと續きたるは、新古今集秋の歌の上」に「いかばかり身にしみぬらむたなばたのつまと待つ宵の天の川風」といへる入道前關白太政大臣の歌あり。たゞしこれも「棚機妻」といふ語の間に「の文字」を入れたるにはあらず。上古機織る女の通稱を「棚機妻」といふなど云へるは妄言なり。よしや假に織女を棚機妻とすること有りと許さんも「媒ち初むる」といふ言葉づかひも亦甚だ妥やかならず、異様なり。「媒妁しそむる棚機の妻」といふにては、一句も聞えかね、聞ゆるにしても何のをかしみも無きことならずばあらず。前句とのかゝり、棚機妻の所以も無く唐突に現はれ來れるを見るのみなり。さまで拙き句をば野水も肯ひ、芭蕉もよしとはせんや、考ふべきなり。扱これはたゞ僅に十四字の句なり、織女星のことを特

に長々しく「たなばたの妻」といふ要あらむや、織女星はたなばたつめと云はんこと正しかれども、既に「古今集より」たなばたとのみ云ひても織女星のことゝなれるは、躬恒が「歳ごとに逢ふとはすれどたなはたのぬる夜の數ぞ少なかりける」又は興風の「契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは」など云へる歌に照らして明らかなり。されば僅々十四文字の句中に特更に「たなばたの妻」といひたる、そこに作者の意の籠りたるならではあるべからず、能くこゝに心を着けて見るべきなり。棚機つ女ならば棚機つ女にてよし、織女星ならば織女星にてまし、特に「たなばたの妻」といひたるは、織女星が「人妻」となり居るとか、棚機つ女が「人妻」となり居るとか云ふならでは、徒らなる重言のやうにてふさはしからず、彦星の妻たる織女星をいふならば「彦星の妻」又は「たなばた」又は「たなばたつめ」といひて可なり、又單に「上代の棚機織る女をいふならば、たなばたつめ」とのみ云ひて可なり、如何ぞ特に「たなばたの妻」といふを須るんや、且又たなばたに「七夕」の文字を填むるを要せんや。是に於てたなばたの妻と作れるところに所以無くばあらぬことを知るべし。

これは織女星が人の妻となれることを取りて作れる句なり。前句は長壽の男を特に童と云ひて其母あるよしを云へり。これ關更が云へる如く、老萊子年七十にして綵衣を着けて幼兒に扮し、嬉笑舞戯して親の心を慰め、顛倒嬌泣して老を忘れしめたる至極の孝行の佛と取らば取るべし。此句は乃ち其孝行に添ひて附けて、孝思の天を感じて、善因必ず善果あり、悲苦の中にも天佑有るおもむきを云へるなり。詩の對句の如き附方なり。對句は一聯二句別々の事を相對して言ひて、一の旨に約さるゝなり。こゝは前句老萊子、此句董永、而して一の孝といふことを歸す。前句はめでたくて母を持てる孝子也。これは悲しくも父をのみ有てる董永といふ貧しき者、常に人に雇はれて農作し、賃を得て日を送れり。父老いて足接えたれば、小車を作りて之を乗せ、田の畔に置きて養ひたりけるが、後に父死して一身子然たり。禮を具して葬らんとすれども、貧にして力及ばず。遂に身を賣りて、僕となり十貫錢を得て葬を了る。美人あり忽然として永が許に至りて曰く、妾の卑賤を惡む勿れ、願はくは君が爲に箕帚を執らんと。永の妻たること一月、かとり絹三百疋を織りて主

に納る。主これを感じて永を釋す。女永に謂つて曰く、我は是天上の織女なり、汝が孝を感じて爲に債を償へるなりと。去つて天に升る。此事を取りて作りたること疑ふべからず。「なかたちそむる」は、織女が董永の債を還し、身上を明し、辭して去ることに、機織り了へて斷つことを掛けて云へるにて、たなばたの妻といふ言葉も、こゝにて意義ある語と響くなり。董永の事は、老萊子の事と共に「二十四孝」に見えて、人知らぬ僻書に出でたる談ならず。美人の孝子を祐けて布を織るの談は、董永の事のみならず、しゞらの物語にも、觀音に侍せる童女此土に現はれて、孝子しゞらの妻となり、布を織りて貧を救ひ、辭して南方に去り、しゞらは七千年の壽を得るの譚あり。此句しゞらの事の佛として解せんも惡がらねど、しゞらの談は足利末期より徳川初期に至るの間に出たるはかなき草紙に見ゆるのみにして其據るところを知らねば、日記故事の董永の事として釋せんかた、織女の稱も見ゆれば、かたゞ以て宜しかるべし。

西南に桂の花のつほむ時

羽笠

「月中に桂有り、高さ五百丈、一人有り、常に之を斫る、樹の創随つて合す、其人姓は吳、名は剛、西河の人なり」といふこと、酉陽雜俎卷一天咫篇に、異書を引いて載す。此事早く我邦にも傳へたりと覺しく、月に桂を詠み合せたる歌、源氏物語松風の卷、月のすむ川のをちなる里なれば桂の蔭はのどけかるらむ、萬葉集卷十、もみちする時になるらし月人のかつらの枝の色づく見れば、古今集、久方の月の桂も秋はなほもみちすればや照りまさるらむなど數々あり。但し、桂の花は詩歌共に言はず、詩に「桂花」と作るは月の桂の花にはあらず、巖桂即ち木犀の花の事なり。武林の月桂峰には月の桂の子嘗て此峰に墜ちて生じたる由の大木ありて、其花白く、其實丹なりと云へど、そは稀有の談にして詩詞にあづからず。こゝに「桂の花」といへるは例の俳諧の言にして、西南に「苔む」といへるも、七日の夜の頃の月いまだ幼く、十五夜の花満開せるが如くならねば、花の苔む時と作れるのみ。月の句なり。前句とのかゝりたゞ七夕といふに因めるのみ、一句は麗はしからぬにあらねど、云はゞ遣句なり。三日四日の月は人の觀る時西に在り、西南といへるの意知るべく、七日頃の月なること猜すべし。

蘭の油にト木うつおと

芭蕉

蘭の油詳しく知らず、伽羅の油も伽羅を用ひて製するにはあらず、蠟と油とを煉りて、いさゝか香を附けたるまでなり。「嬉遊笑覽」に多く雜書を引きて記せり。「梅花の油」「丁子の油」皆たゞ其名を假るのみ。椿の油は椿の實を絞りて製するなれど、それさへ今は支那より得知れぬ油を輸入して、伊豆七島の産と偽るなり。舊解、陳藏器の説を引きて「蘭草は澤畔に生ず、婦人油に和して頭を澤にす、故に蘭澤と曰ふなど」と記したれど、迂遠なることなり。但當時「蘭の油」といふがありて、蘭の香を移しとゞめたりと云ひしならん、まことは胡麻または胡桃、菜種などをもて製したるなるべし。此等の油を搾るには、これを蒸して木格内に置き、ト木シキをかけ、大槌をもてト木を打ちて、漸々に逼めつけ、其油分を搾取するなり。さればこそ「ト木打つ音」とは作りたるなれ。一句は日の短きに夜をかけて油つくりの槌の音さするところを言ひたるまでにて、蘭桂の對を取りて静かなる夕暮に物の響を聞出したる前句へのかゝりなり。

賤の家に賢なる女見て歸る

重五

前句を城下はづれの田舎、藁屋茅屋の三々五々と在るあたりと見て、油搾むる一と構の家のかたへなる小家に、其村の褒め者となれる貞淑賢良なる噂の女を、あれなるかと見て歸るなり。秋の「花野遊山」か「初鳥狩」などの歸るさなるべきにや。よく句の姿を味はふべし、其人品おのづから見ゆ。「秋風辭」の「蘭有秀兮菊有花、懷佳人兮不能忘」などを引くには及ばず。油搾むる家の何軒隔てゝの隣などゝは豫て聞きて知り居て、今其音に慥に彼の人ならむと奥深くもあらぬ家に病夫などかしづき仕ふる其姿を見たるなり。江口の君の倂といふは非なり。

釣瓶に粟を洗ふ日の暮

荷兮

前の句の女の爲せる業を付けたり。釣瓶の中にて粟を洗ふにはあらず、釣瓶の水を直に用ゐるなり、井の端にてのわざ、今も賤女の爲すこと是の如し、柄

杓を用ゐざるをいふなり。

はやり來て撫子かざる正月に

杜國

撫子は罌麥にして六月の季の物なり。「はやり來て」の五文字に目を着くべし、撫子をかざることの流行するにはあらず、正月を歳の首にせずして六月なるとにすることの流行り來てなり。古の俚俗、たとへば十二月などに大疫病大地震などありて、正月を祝はんとするも其事叶はざる時は、一月には正月の儀を執行はで、五月六月などに年始の式を爲し、男女兒童等、業を休み遊び樂む。故に「寛文七年七月町觸に、今度在々所々にて松飾を仕り正月を祝ひ申由、江戸町中にも右之通正月を祝ひ申事堅く無用なり」とありといふ。撫子は蓬萊飾のこゝろにて飾るなるべし。前句粟を洗ふを粟の餅搗かんためなりと見て此句を附けたるなり。

つゝみ手向る辨慶の宮

野水

つゝみは米錢などを白紙に包みて堂社に供ふるを江戸には「おひねり」といひ、田舎には「包手向」といふよしなれど、其包にはあらず「鼓」なるべし。鼓を撃つて法樂たてまつるなり。「手向」は佛にのみ云ふにあらず神にもいふなり。「辨慶の宮」甚だ耳疎くめづらしけれど、奥州には平泉のみならず、稀に有る歟。「鳴るは瀧の水」と舞ひたるにせよ、辨慶の宮に鼓手向くるなど、如何にも田舎めきたるところ、前句の「勝手正月」にかゝりて、邊土の風情十二分なり。

刁の日の旦を鍛冶の急起て

芭蕉

「刁」は「刁斗」の刁なり、刁斗は漢書の註に「銅を以て鑪を爲る、一斗を受く、晝は飲食を炊き、夜は撃ちて持行く」とあり。之を鳴らして衆を警め時を報するもの。鑪は片手鍋なり。刁を寅の字に代用するは古き俗なり。刁斗は鳴らすもの故、「どら」の意にて「寅」に用ゐるといへり。「急起て」は「とくおきて」と訓むべし、「はやおきて」と訓む人もあり、「せき起きて」と訓む人もあるべし、「夙興夜寢」の語もあれば、はや起きてならば夙興ともあるべく、とく起きてと訓むこと普通となり居

れり。寅の日鍛冶に用ゐるべき由の故實など有りとも覺えず、たゞ寅は泰の卦に當り、陽氣盛にして、武にふさはしき故に、かりそめに取用ゐられしならむ。「三寅の太刀」伊豆權現に納まりしなどいふ事、確説にもあらず、有名の鍛工水心子の「玉函」などにも寅の日の説無し。前句辨慶の宮、武に名だゝる人ゆゑ、鍛冶の利劍鍛はんとて未明に參り祈願するまでの風情なり。

雲かうはしき南京の地

羽笠

南京は漢土の南京にはあらず、干將莫耶を思寄せて、もと吳の地の南京を作れりといへるは非なり。「南京」は奈良なり、奈良の京といひ、南京ともいふ。奈良は鍛工多く、今猶然り、般若院の文珠四郎以來、よく切るをもて誇るところなり。「清正記」にも、清正、奈良身の一振も持たば立身出世は心のまゝたるべしと云へりとあり。「雲かうはしき」は其の古帝都にして、大寺多く、なみならぬところなれば、雲芳しきとは作れるならむ。前句へは鍛冶の其場所を付けたるなり。「地」はつちと訓むべし、或は曰く、土地の土の字を脱したるならむと。

いかきして誰ともしらぬ人の像

荷兮

いかきは齋籬イカキにして、瑞籬に同じ、神社の籬なり。奈良は舊都なれば、名有る堂宮の多きは勿論、齋籬など圍ひ繞らして、おのづから香煙さゝぐる人は有れども、扱其祠られたる人の像の誰とも知れぬがあるなど、流石に古き都の事なり。そこを言へるが此句にて、前句とのかゝりも註を要せず。「豊公の弟大和」大納言の像の奈良の町はづれの圃中に在るを言へるなり」との註は、却て誰とも知らぬといへるに反してをかしからず。

泥にこゝろの清き芹の根

重五

芹摘む女、聖徳太子に其賢を知られて太子の妃となる、これを芹摘の后とも膳夫姫といへり」といふ覺束なき故事を引き、此句を解するはいらぬことなり。奈良の古話など、假令其事眞實なりとも、こゝに用ゐんには、一句前の雲かうはしきに戻りて扉となるべし。たゞ美しく清らかなる芹を、泥にこゝろの

清きとは云へるにて、前句の齋籬のあたりの流れに生ひてあり、と其場のあし
らひに似合はしく言葉づかひしたるなり。贅疣懸瘤の解をなす勿れ。

粥すゝる曉花にかしこまり

野水

清き芹を七種粥のそれに取りて、人々の祝儀に一家清穆のさまを附けたり。
花に別義無し。「膳にかしこまり」として興無からんよりは、席に一瓶の花あり
として「花」とは作れるなり。第二の裏六句の中、花の句あるべし、句の花とい
ふ。今前句の縁に引かれて、やゝ早けれども花を出したる、無理ならで宜し。

狩衣の下に鎧ふ春風

芭蕉

狩衣は盤領にして袖くゞりあり、單の絹もて作る、公家の服なり。「狩衣の下
に鎧ふ」といへるにて、武家ならぬこと知るべし。鎧ふは取りよろふの意には
あらず、鎧着るなり。前句を事ある曉の陣中の粥と看、人々肅として、いざやこ
れより如何なる命をも仰がんとする氣勢の中に、文ある狩衣したる貴き人の

春風の渡るが間に鎧はへるさまを附けたるなり。「鷹狩など、解せるは鎧ふ
といへるをば平生の衣着重ぬること、解せるにて非なり。たゞ衣ひき重ぬ
ることを鎧ふとは云はず。よろひといふ語、もとは一具二具の具の義にして、
六具をば身に着くるより、鎧を具足とも云ひ、具足を鎧とも云ふなるべけれど、
下に鎧ふとあれば、言葉の勢、句の姿、たゞ防寒の用意の衣きよろふと云ふには
あらず、鎧を着けたる上に狩衣軽く被きたるさま見ゆ。「太平記」の芳野あたり
の佛見えて、前句の「かしこまり」の一語微妙に此句に活用せられ、此卷の二の表
以下やゝ緩みて、残山剩水の眺め、人をして心怠り氣萎えしめたるを、こゝに至
りて芭蕉きつと振起して、掉尾の觀、目も覺め魂も躍らしむるものなり。

北の方なくく簾押やりて

羽笠

北の方は前句の鎧ひたる人の北の方なり。出陣の名残、立上りて目ざはりの
簾押遣りて、遠ざかり行く影見送るさま、蛺蝶夢既に断えて、春風雲鬢に冴返
るの光景、ことわりせめて哀れなる戀なり。

寝られぬ夢を責るむら雨

杜 國

一句甚だ佳なり。寢もせず寤めもせず、現とも無く夢とも無き獨寢の苦しき夜半に、むら雨はらくと愁思の枕を驚かしたるところを、よく云ひ取りたり。しかも此句、必ずしも戀の句とのみにはあらで、其含める意甚だ廣く、觀念悟道の意に取れば、山家集の「山川のみなざる水の音きけばせむる命ぞ思ひ知る」といふ一首を一句につゞめたりとも思はれて又深刻痛烈に、前句を戀の句と取らねば、此句も戀の句とならで自から妙あり。螺貝の色、必ずしも紅ならず必ずしも青からず、又紅又青にして、奇彩人の眼を悦ばしむるが如し。林西仲莊子の文を評して螺貝に比す、莊子のみならんや、妙文皆然り、此句亦然り。何ぞ戀の句なると戀の句ならざるとを論ずるを要せんや。

舉句は平和安穩の章を以て一卷を結ぶこと、正式連歌以來常套となり居れり。然れども興趣の趨くところ、必ずしも拘泥す可からず。此卷此句の如き、芭蕉が詩の神情を重んじて形式を重んぜざるを看取すべし。「炭賣の巻終」

田家眺望

霜月や鶴のつくく並び居て

荷 兮

鶴は鶴に似て、頭に朱冠無く、頸に玄帶無し。目のあたり、嘴の根赤く、全身白く、翼下黒し。翹端の羽に淡白にして光有りて霜の地に布ける如きあり。これを鶴の霜降といひて箭羽に珍重す。別にこれに因みて句を作れるにはあらねど、霜月頃の霜厳しく天寒くして、田面さびしく物無き折柄、鶴のつくくと並び居たる景色、作らず飾らず其儘にして佳き句なり。「大鏡」に鶴の鳴くことを頻りに説けるはあらずもがなの事なり。鶴は善く唳かず、喙をもて相撃つて鳴くところを云傳へたれ。又「酉陽雜俎」を引きたれども、蛙抱聲、鶴抱影などと誤れり。これは「同書卷十六、廣動植之一」に見えたることに、影を抱き聲を抱くにはあらず、鶴影抱、蝦蟇聲抱とあり、影もて抱き、聲もて抱くなり、此句に關すること無し。升六が「鶴の霜ふり毛などむらく風に亂れて」と云へると共

に、いづれも笑ふ可き誤謬なり。田家眺望と題しての此句、寫實の一章たり、何の疑か有らん、羽の論も影の説もいらぬことなり、たゞ其のつく／＼とならべ
る姿を觀じて、荷兮が靈腕、霜月のたましひを人の眼前に把住し來れるところ
を看るべし。

冬の朝日のあはれなりけり

芭蕉

發句「て留り」にて、常套ならず、此句また「字留り」を用ゐず、やゝ異體なり。され
ども、て留りの發句も世おのづから有るべく、字留りならぬ脇句もまた世おの
づから有るべし、又て留りの發句に字留りの脇句もあるべし、唐崎の松は花よ
りおぼろにて」といへるに、山は櫻を絞る春雨と附きたるが如し。是の如きの
事、こちたく論ずるを要せぬことなり。此句前句を承けて、氣象いとよろしく
付き、清新幽麗なり。本によりて「あはれを哀れ」と書けるは甚だ心無きことな
り、あはれとあり、哀れとあるにはあらぬなり。あはれを哀れとのみ覺えたる
はをかしからず。元來あはれといふ語は日に縁ある語と云はんよりは、日の

美しく照るところより起りたる語とされ居れば、芭蕉もこゝにおもしろしと
て用ゐたるなるを、哀れなどゝのみ取りては、それにて七八分は濟めども十
分には濟まず、指を以て海を測り、指盡きて海の深さはの如きのみと思へると
同じ。人も知りたる忌部廣成が「古語拾遺」を見るべし。日神天の石窟に入り、
磐戸を閉ぢて籠りましたし、時、六合常闇にして晝夜分たずなりしかば、衆神之を
歎きて慰めまゐらせ、共に祈禱を致して辛くも復此世に御姿を仰がせたまふ。
此の時に當りて上天初めて晴れ、衆俱に相見面皆明白なり、手を伸べて歌舞し、
相與に稱へて曰く「阿波禮、阿那於茂志呂、阿那多能志」と。「阿波禮の註」に曰く「言
ふこゝろは天晴也」と。あはれといふことに本づき、後にはめでたき事物を
見てもあはれといひ、愛し思ふことをあはれむと云ひ、愛する心のさまは悲し
むと同じやうなるより、悲しむをもあはれむと云ひ、悲しきこともあはれと云
ひ、遂にあはれと云へば哀れといふやうにのみ會するやうになれるなり。邦
語にかなしむといふは愛すると同じ意にて、古歌に「悲し兒」といへるは最愛の
兒といへるに同じきをもて、あはれといふ語の歎美、歎惜、憐戀、哀憫、莊嚴、悲傷等

に通ずるを曉るべし。朝日のあはれと續きたるを哀れとのみするは甚だ非にして、本「あはれ」とあること故、哀れとはすべからず、必ずや「あはれ」として、冬の朝日の淋しき田野のはてに出でたる美しくもあれば哀れにもあり、なつかしくもあれば悲しきやうにもある其の不可言不可説の感、即ちあはれといふ語の有する一切の意を以て端的に「あはれなりけり」と解すべし、哀れの文字を填することきは狂妄愚劣のわざなり。扱又此句心詞共に俳意無しといへるも非なり。冬のと朝日の上に冠せたる、而してあはれなりけりと云へる、俳諧の骨髓ならずして何ぞや。前句とのかゝり、説くを須るす、此のあはれなりけりの中に、霜月の時節、鶴の姿、皆籠りて更に遁るゝところ無し。

檜檜山家の體を木葉降

重 五

舊註に曰く「朝晴の後、雪嵐起り、嚴寒に凍りたる庭前の常盤木のはら／＼と降る如く落盡すなり」と。檜檜の類の寒ければとて降る如く落つるといふこと、まことしからず、心得難し。又一説に曰く「田家の庭前ながら木葉の降るを

見れば山家の體なりといふ句作なり」と。さらば「山家の體に木葉降る」とありたきところなり、體を木葉降るにては、手爾波とゝのはず。且第三の此句猶田家のさまとありては、田家眺望と題したる發句と同境にして、輪廻執着の誘免れ難かるべし。關更は體の字眼なりなど、云へれど、此句の體を「と使ひたる言葉、實はふつゝかにして、穩當なる解望み難し。檜檜山家の體なるを木の葉降る、と解するとも何の事なるや知る可からず。疑ふらくは寫誤あらん。「體」若し「てい」と假名文字にてありしを體と填字したるならんには、亭と解して通すべし、亭は母屋より離れたる小さき建物なり、檜檜山家の亭を木葉降る」といへば、檜檜に囲まれたる山家の其亭の、母家とは違ひて何の木葉とも無く風に齧らされてはら／＼と降るにて、冬の朝の景色眼に看るが如し。又「てゐ」とありしならば、てゐは座敷と云はんが如し。俗に「亭居」の字を填し「てゐ」と濁らすに訓し「醒睡笑などにも見えたれど、本來は「出居」にして、家の奥に對する室の稱なり、奥より出て客に對する處即ち出居なり。出居ならば、檜檜に囲まれたる山家の木葉など降るべくはあらぬなるが冬の朝風に、椶櫚などさま／＼の

大木の葉の何處よりも無くはらくと其出居に降り來るところを云へるにて、一句まことにおもしろく、冬の朝日と打開けたる景を云へる前句との附も、いかにもと思はるゝなり。舊解皆體をの一語を云紛らかし、ひづみありて無理なれば試みに此説を爲す。「體を」にて無理ならぬ解あらば、疑を懐けるの癡を慚ぢんのみ。

ひきする牛の鹽こぼれつゝ

杜國

前句「木葉降る」といへる風あること明らかなり。牛の性風に順ふを好み風に逆らふを悦ばず、故に引ずられ行くまゝに、荷の岨に觸れ樹に支へられなんどして鹽こぼるゝところを作れり。「埤雅」に曰く「牛走順風、馬走逆風」と。前句の山家に牛鹽の附解におよばずして明らかなり。牛は馬よりも峻岨に用ゐるに宜しき、是も亦人の知るところなり。

音も無き具足に月のうすゝと

羽笠

「吳牛の月に喘ぐこと」をこゝに引用ゐるは贅疣なり。前句を籠城防戦の準備に峻坂山路を鹽を搬ぶと見て、此句あるか、或は敵地を通り抜けて味方に力を添ふると見て、此句あるか、いづれにせよ戰場軍旅の風情なり。「音も無き具足」をたゞ飾り置くのみとするは非なり。月の薄々と具足に照るなれば、無論着用せる具足なりと知るべし。「音も無き」は、輕快敏捷を主とせる行動に、鎧の全部迄は着けず、小具足して忍びやかに敵の眼もくらき薄月の夜に鹽附けたる牛を急がすところをばおもしろく云ひ取りたるなり。一句もよろしく、前句とのかゝりもよろしく、樹蔭過ぎ行く籠手の上に月の光の薄々と射したる、人情夜景、共に妙なり。

酌とる童蘭きりにいで

野水

前句を夜襲出陣の前の一軍肅然として片唾を呑みたる静けき宴と見て、此句ありたるなるべし。舊解に「前句の具足に月の薄々と照りたるを敵の刺客と看、これを悟りたる大將の誰かある、花活けて興を添へよといへるに、酌取る

小姓の心得て蘭切らむと立出でつゝ、月下の人影を屹と見るところなり」といへり。餘りに演劇めきて却て實に遠からむ。敵の刺客ありと悟らば、戦亂の世に何の憚るところあらむ、細腕の小姓などを花を探るに托して庭に下立たすべくもあらず、直に勇士をして捕へしむべきなり。且又然る場合に蘭を切ると特に言ふべき所以もある可からず。解に過ぎたりといふべし。こはたゞ前句を出陣と見て、當座の機轉に小童の庭に下立ちて瓶花を切るなり。池の坊傳に、出陣の花に蘭を用ゐ、亂を切鎮むる祝意とすと云へる由を擧げたる解もあれど、然る傳有りや無しや覺束なし。蘭はふぢばかまの蘭か、春蘭建蘭の類の蘭か、前句秋なれば、春蘭ならぬ限りはいづれにても宜しかれど、切りに出づるといへば先は庭前の藤袴なるべきか。藤袴を出陣の花とし、亂を切鎮むるといふ祝意とするといふこと、餘り耳にせず。出陣の花は、仙傳抄に「一切散り易き花、椿、楓、躑躅、其外萎れやすき草木を嫌ひ、葉かづき常盤なるもの、歸り花然るべし」とあり。同朋などの瓶花を立つるにもあらず、酌とる童のすることなれば、深く論すべきにもあらず、たゞ蘭は季節のあしらひまでに句中に出

來れるならむ。拘泥してこちたく解するは陶淵明の求めざる「甚解」といふものなるべし。

秋の頃旅の御連歌いとかりに

芭蕉

月卿雲客も旅路とあれば筈に盛る飯も椎の葉に、よろづの事いとかりそめに、その處に淋しき秋の日、庭前の蘭を見たまひて發句あり、酌とる童下立ちて其花を活け、贊美の雅什に答へければ、それより興はずみて、連歌の式立ちて殿そかに執行はるべきものながら、いと略儀のやすくと出來たることをいへるなり。場處事情をば轉じたるのみ、別に深意あるにはあらず。

やうやくはれて不一見ゆる寺

荷兮

前句の連歌行はるゝは勝景旅懷をくつろぐるに足る處にて、風雅の名だゝる君の素通りもなるまじき地なるより一卷催されたるものと見て、扱主客の心々に其席より素顔雪肌日本無双の靈山の見ゆるを待ち居けるに「表」も濟み

て幾句か進みたる頃、やうやく雲霧開け晴れて、美しき姿の見えたれば、人々互ひに悦びあへるさまなり。連歌の中に、名山の坐に入らざるを啣ちて、仙姿の我が眉を壓せんことを祈り求むる意の句なども有りしやとおもしろし。心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ空に晴れし不二の根を欣仰せるさま言外に見ゆ。相州藤澤遊行寺不二見の間などの事なるべし。

寂として椿の花の落る音

杜 國

雲凝り露重うして椿の落ちたる、此花の風情、此境の光景、まことに宜しき寺の静けき庭のさまなり。殊に「音」といへる、閑寂身にしみて、清浄なる蘭若の塵雜を隔てたる體明らかにして宜し。前句に對しての働き、一句の自ら立てる姿、ともにすらりとして難無し。

茶に絲遊をそむる風の香

重 五

「いとゆふ」の語、いつの頃より言ひ出でしか詳ならず、おもふに古きことなら

ざるべし。文永に成りたる續古今集卷八、非有非空の心を詠したまへる太上天皇の御歌に「大空をむなしと見れば絲遊の有るにもあらず無きにしもなし」とあり。これは絲ゆふと訓むべきにや、若くは「絲遊」にはあらで「遊絲」とありしが誤りて絲遊となり、それより「いとゆふ」と訓み來り、遂に一語をなすに至りたるにあらずやともおもはる。遊絲とあらば「かげろふ」と訓むべきこと勿論なり。遊絲は漢語にして、陽炎の狀の遊絲の如くなるより云へるなり。但しいとゆふの語、既に用ゐ來りて年月を経たれば、重五を責むべきにはあらねど、好ましからぬ語とすべし。扱一句のおもむきは、絲といふ縁によりて、茶に染むるとは云ひたれど、陽炎の何に映じたればとて、日の匂の茶色になるべくもあらず、又「椿に懸竿の餘情もあらんと云へる」も非にして、舊解すべて作者の意を得たりと云ふべくもあらず。「風の香」といへる香の語をいかにせんとはするぞ。これは茶色にはあらず、染むると云へばとて色を染むるのみにはあらぬ也。陽炎ゆら／＼と立つところにあるか無きかの風渡りて茶煙軽く靡き掛り、いとかすかに廬同遊外の徒の喜ぶところの香の添はりて流るゝをば、彫鏤

の手段を盡して「茶に絲遊をそむる風の香」とは作れるなり。前句をよくく味はひて、此句に參すべし、此句の字を配り語を措けるに千鍊萬鍛の巧ありて、爐のほとりも漸く懐かしからざらんとする春の日の暖く麗らかなるさま、畫の如くに浮み出づべし。これを「日の句の茶色に見ゆる」など、皆眼盲評を敢てして、而して「百千にもあく谷陰の道など、いへる悪句を提出して、かく會釋するところなり」と云へる、陋愚にして自ら高ぶれる、笑ふべく惡むべし。

雉おひに烏帽子の女五三十

野水

此句人を驚かしむ、豪壯狂肆、いづくにかかゝる事あらんや。關更曲齋升六皆解に苦しめるも宜なり。されども一句おもしろく、前句とのかゝりも甚だ奇なり。思ふに當時野水一座を睥睨するの概ありしならむ。芭蕉が喜びしや否やは知らず、流石の荷兮も驚きしなるべし。關更曰く「木曾義仲の野遊に巴山吹に烏帽子着せて酒興の倂ならんか」と。義仲巴山吹などに雉を逐はせたることも無く、又然る事爲すべきやうの場合に立ちたることも無し。木

曾に在りたる時は義仲未だ志を得ず、京に上りては基房の女に溺る。いづくに義仲の事たるべしと想はるゝふしあらんや。曲齋曰く「御殿女中の物ずきなる遊なり、雉おひとは山間の廣き地へ求食に出でたる雉を西より追ひて東へ飛ばせ、東より追ひて西へたゞせ、遂に翅勞れて落伏すところを手取りにする狩なり」と。扱々物好なる御殿女中あるものかな、ポインター、セッターなどいへる御殿女中ならばいざ知らず、尾上岩藤の輩ならば、雉よりもさきにへたばり伏すべし。升六曰く「あまたの宮女烏追の遊興となしたる、いとみやびなり」と。美人をして雉を追はしむるに、何のみやびの有らん、殺風景の甚だしきものならずや。すべてこれは皆かゝる事ありと解せんとするによりて、窘窮甚だしきの説を爲すに至るなり、かゝる事もありたらんと想ひて作れる句として解する時は、おのづからに其の言へるところを會すべきなり、詩歌俳諧はまことに有りたる事をも詠するものなれども、また想を運らすべき廉ある時は、そこより想を運らして事を描き情を寫すことも有るものなり。まづ女の鳥を追ふといふこと、謠曲に金剛作の「鳥追船あり。薩摩の日暮某の子花若およ

び妻、主人の都に上りて歸らざることを十年に至りたれば、良からぬ從臣左近尉の爲に逼られて田面の水禽を追ふことを傳ふ。又、岩木山權現傳説あり。津志王丸安壽姫二人の母、佐渡に賣られて盲となり、鳴子板を引鳴らして鳥を追ふを事とすることを傳ふ。謠曲ならびに説經淨瑠璃等はいづれも當時の人に親しきものなり。されど此等の鳥を逐ふや、稻田の爲に逐ひ、粟畠の爲に逐ひ、雉を逐ふといふこと無く、且又いづれも孰然無力の人にして、烏帽子の女五三十などいへる盛なること無し。然るに今や雉を追ふと作り、烏帽子の女五三十と作れるは、すなはち俳諧にして、其の哀れに悲しき古談を踏みて、反つて意外のところを用ゐたるなり。前句は茶煙軽く颺つて陽炎香を帯べる安穩閑靜の景にして、俗を脱せる平和の境に人を饗するが如き風情あり。さればこれを谷に峰に院あり坊ある比叡山内と看るも然るべし。野水は尾張の人にして年代も亦遠からねば定めしよく知りたらん。もと尾洲の太守にして後に殺生關白の惡名を流したる豊臣秀次は、文祿二年正月(太閤記六月)多く婢妾を携へて叡山に上りて獵す。晝はひねもす狩くらし、夜は夜輿を引き、鹿猿

狐兎より鳥類に至るまで、獲る所甚だ多く、諫むる者あるも、我は關白なりといひて納れず。南光坊に於て腥羶を烹炙す。隨ふ所の美人、お長御方、お辰御方、おさこ御方、中納言御方、おつま御方、おいま御方、あせら殿、おあこ御方、おさな御方、およめ御方、お菊御方、お牧御方、おあひ御方、お竹御方、おなあ御方、お藤御方、おさき御方、お虎御方、おこゝ御方、おこほ御方、少將御方、おこちや御方等、これ皆嫡に耦ぶものにして、後房殆ど數百人なりしとなれば、此他の色ある女ども數十人も亦隨へるなるべし。傳教大師以來、女人を禁じ殺生を制したる山中に、銃聲と嬌語とを響かし、煙硝と脂粉とを香はせたる、其の兇狂淫蕩の有様、驚くべく歎すべかりしなり。まさかに其實は美人に烏帽子きせて雉を逐はせたることも無けれども、これを雉逐ひに烏帽子の女五三十と云ひて、たゞ十七字の幻術を以て其の火の旋るが如く花の亂るゝが如き狩獵と淫亂との滾沸混淆せる怪奇妖異なるさまを云取れるなり。古の鳥追船などの哀れなる談を踏まへて「雉追ひに」と卑しげに易々と云ひて「烏帽子の女五三十」と恐ろしき驕傲のさまを云ひたる、句作りの豪なる感すべく、前句は繊細を以て巧に、これは粗

豪を以て妙なり。このほかに五三十の女と前句とのかゝりを解すべき事あらんや。此句の「烏帽子」は虚中の虚にして「關白の側にあるところの立派なる」と云はんが如し。前句の茶を茶色なりとして、此句の烏帽子の紐の色なりなどいへるは、まことに興も無き解なりといふべし。殺生關白と解したるは、さすがに貞享の俳諧に眼を青うしたる麥水の功なり、吾が功にあらず。茶煙禪榻の淨地に脂粉砲火の異態を附けたる、野水の詩膽才藻も亦さすがに大なりといふべし。

庭に木曾作るこひの薄衣

羽 笠

木曾の風景を擬して庭に山水のおもしろきさまを作る大名などの奢侈といへる諸舊解はよし。但し、木曾山の景作らむと、薄衣着たる侍女に土を運ばせ木を植ゑさすといへるは笑ふべし。搬土植樹の勞に花顏柳眉の人のいかで堪ふべきや。それは人情に遠きの事にして、人事に疎きの解なり。「戀の薄衣」といへるを解しかねての強語誣言なるべし。これは前句の秀次の後房

甚だ多くして、しかも優にやさしき戀の情などは無かりしところを看取し、それにも似たる大名または富豪の庭に、木曾の景などを模して、其庭中の山のあなたに一人、橋のこなたに一人といふやうに美人を畜ひ置きて、まことの戀のなさけは知らず薄きをば云へるなるべし。「拾遺集卷十四、中々に云ひは放たで信濃なる木曾路のはしのかけたるやなぞ。源頼光こはあなたこなたへ懸けて物いふ女に興へし詰りごゝちの戀の歌なり。千載集卷十四、淺ましやさのみはいかに信濃なる木曾路のはしのかけわたるらむ。平實重「これも、女のかよふ人あまた聞ゆるにつかはしける」と前書ありて、我にのみならで人にも心をかけはしの揺めきて定め無きを恨み詰りたる戀の歌なり。此句は女的心多きをいふにはあらで、例の俳諧にて、反つて男の足るに任せて誠のなさけ厚からぬを「庭に木曾作る戀の薄衣」とはおもしろく句づくれるなり。此句の雉追ひより木曾の按じ出されたらむは諸舊解の如くなるべけれど、此の作り庭に雉を畜置き、妻妾を巴山吹に擬へ、侍女を男粧せしめ、おのれ義仲となり戯る」といへる曲齋の解は、あまりなることなり。連句の附方といふことを我知

り顔に説けども、其言甚だおぼつかなし。すべて附方といふものは、附句ありて後に、人其附方を悟りて、かゝる附方ありと論したるものなり、先づ附方ありて後に附句出來ると思ふは後世の迷なり。文法語法ありて後に文章言語の出づるにはあらず、文章言語ありて後に其文法語法をば、かゝるものぞと達者が人に示して、さて文法語法は世に現はるゝものなり。法の眞實なるは、事法俱生なればなり、法のみ先に生ずるものにはあらず。支考以前、芭蕉以前、貞徳以前、心敬宗祇以前、そもく、連歌未だ盛んならざる以前、いづくに附方の法あらんや。美濃派の附方の教は親切にして後人を益すといへども、法を籍りて之を威すものには届すべからず。義仲となりて戯るゝといふ如きことならでは前句に附かずと思へりや、人をして鑿鑿せしむるの解なり。

夏深き山橋に櫻見む

荷 兮

「古今集榮雅卿の抄」を引きて「山橋はやぶかうじなり」といひ「八雲御抄」を引きて「牡丹なり」といへる、いづれも然るべきに似たれど、皆要無きことなり。やぶ

かうじは三五寸のものなり、何ぞ櫻と伍せしむるに足らんや。牡丹は花王ともいふなれど、牡丹ならば牡丹といふべし、何を苦みてか俗語俚言をも避けざる俳諧に「八雲御抄卷三」に、一説として挙げたまへる「山たちばなは牡丹なり」といへる如きを紙魚の香の中より引出す要あらむや。此句は「夏深き山」にて一度句切りて讀むべし。さて「橋に櫻見む」なり。橋と櫻との相ならべるものなるは紫宸殿の御階の下の雙樹このかた人も知るところなり。橋は夏、櫻は春のものなれど、山には櫻の夏に入りて開くこと異しむべからず。此句はたゞ見むといふにて、願ひなり想ひなり。橋と櫻とを見むといふところに「戀のうす衣」の響も句もありて「夏深き山」とあるに、庭に木曾作るの移りもあるべし。斯ばかり見易き句をも「山橋」などゝ心慌だゝしく讀みて、強ひて僻解を下すは心得難し。「古今集卷十三」我戀をしのびかねては、足引の山たちばなの色にいでぬべし」の歌に引つけられて、一途に山橋とのみ思へる故にやあらん。「萬葉集卷十一」の「足引の山橋の色に出で、吾が戀ひなむを人目忌ますな」の歌と共に、その山橋は藪柑子なり。

麻かりといふ歌の集あむ

芭蕉

278

前句を都會の塵空に遠くして夏に入りて櫻咲くやうなる山里に世を閑けく送らむと願へる人と見て、其人のわざを附けたり。歌の集編むは、山家集、月清集などの如き一家の集をつくらむとするにはあらで、夫木抄如き私撰の集を作らんとすること、あむの一語にて人をして推測せしむ。「麻菴」といふ集など、もとより有るにはあらず、時に臨みて芭蕉の作り設けたる名ながら、其名甚だふさはしくて佳なり。「夫木」はもと「夫桑」の二字を用ゐんとしたれど、憚りて夫木とせり。「麻かり」はまた遙にへり下りて、しかも雅に、しかも寂びたり。前句を一轉し、草莽の歌仙を點出せる甚だおもしろく、特に空想に活生命を賦して其内容もおもはるゝ如き「麻かり」といふ名を撰めるは、さもく然る人然る事あるやうにて妙なり。

江を近く獨樂庵と世を捨て、

重五

前句の歌集編む人の居を云へり。「獨樂庵」といふ庵の有るにはあらず、これも空想に詩魄を寄せて撰したる名にして、前句に麻刈など、實在らしき名ありたれば、それに對して做出したるにて、これ連句に多き前句との和聲協律の如き法なり。「獨樂」借樂の字面は、孟子に出でたれど、それとは關係無し。又司馬溫公洛に居り、國子監の側に地を得て「獨樂園」を創めしことあれど、それとも關係無く、彼は園なり、此は庵なり。「江畔の歌人麻刈」といふ集を編むを聞き、すなとり集とか蘆刈集とかいふべきを麻刈とは文盲なりと大言吐くさまなり」と前人の注せるは過ぎたり。然まで甚解するには及ばぬことなり。たゞ句のまゝに解して可なり。

我月出よ身は臃なる

杜國

此句は實によく前句を味はひ取りたるのみならず、一句もやすらかにして韻あり。舊解多く「煩惱の雲鎖して眞如の月暗きを歎するなり」と爲す。これ尋常一様の談にして、更に妙無し、たゞ詩歌の皮肉を論じて髓腦を遺るゝもの

279

なり。よく前句を味はふべし、獨樂庵と世を捨て、とあり。獨樂は借樂に若かず、世を捨つるは世とともに生を遂ぐるに若かず。若し夫眞の「棄恩入無爲」の道心者ならば、獨樂の二字、甚だふさはしからず、他力を仰がば、厭離欣求の念に急なるべく、自證を欲せんには、勇猛精進の行に勵むべし、獨樂といへるは孤獨にして樂まんことを思へるなり、獨樂庵と世を捨てたるは世と偕に樂む能はざるなり、と見て取れば、江を近く、の五文字も滄浪の水に身をこそ投せざれ、其足を濯ひて、獨り立つて悶えざる茶人などやうの人のさま無きにあらず。そこを斟酌して、何かの故ありて身退きたる者の、蘆の籬、竹の編戸の中に在りとして、「吾が月出でよ身は臙なると、ひそかに思へる節を其隱士になりて云へるなり。」吾が月出でよは、吾が退身の因縁に明り立つことの來れかしと願ふ意を、江上の春の夜の半暗半明なるに付けて發したる胸中の聲なり。身はおぼろなるは、罪業深重なるを歎く道心者の肚裏の感にはあらず、疑雲冤霧を被れる憾なり。畢竟前句を「道心者」と見て附けたると、「道心者にはあらぬもの」と見て附けたるかの差によりて解もおのづから異なるべし。好みて異を立つ

るはあらねど、獨樂庵と世を捨てたるを、たゞに道心者と見て取らむは麤なり。又此一句の調子をも精しく味はふべし。人蓋し吾が言に點頭せん。

旅衣笛に落花を打はらひ

羽 笠

前句の臙夜の春に立てる人の狀を附けたり。旅泊の初更二更頃、月あれども猶未だ薄雲を出でず、花開いて既に征衣に落ちかゝる時、春宵の風情、羈客の心腸、言はんと欲して言ふすべ知らぬものを一管の横笛に托して石裂け泉咽ぶ聲の中に寓するところを云へるなり。別に意あるにあらず。行平實方なんだの梯として解するには及ばず。

籠輿ゆるす木瓜の山間

野 水

籠輿は「のりもの」と讀むべし、「牢ごし」と訓むは非なり。此句言葉づかひ確ならず、三様に解せらる。一は籠輿に在るをゆるすにて、即ち籠輿より出すなり。他の一は籠輿を用ゐることをゆるすにて、即ち籠輿に乘らしむるなり。又一

は籠輿を昇くことをゆるすにて、即ち自ら籠輿より下りるなり。舊解皆第一の解を取り、前句を公卿の流人とし、これを警固の武士の情にて、籠輿より出しやるなりと爲す。よりにて籠輿を牢ごしと訓むものも生ずるに至れるなり。されど細心にして考ふるに、木瓜の盛りなるを見て一曲の笛を弄すといへるも異様なることにして、肯ひ難きふし無からずや。木瓜は山路に無きことも無けれど、普通にほけといひて高さ四五尺より一丈ほどに及ぶ貼幹海棠は、然のみ群れ簇りて生へるところあるをも見聞せず、ほけの山あひなど云ふべきものとも覺えず、甚だいぶかし。勿論木瓜の名實、さまざま考ふ可きところあれば、新井白石に「木瓜考」あるほどなり。考に據れば、漢土にて木瓜といふは我邦にてまるめろと云ふものなり。我邦にてほけといふは漢土の榼子なり。句中の木瓜はまるめろにも榼子にもあるべからず、まるめろも榼子も山あひを埋むるまでに茂り生へる地あること無ければなり。こゝに木瓜とあるはもとより本草の詮議を盡して字を用ゐたるにもあらず、たゞ俗語のほけといへるを文字にしたるまでなることは論無し。俗のほけといへるものにて、甚

だ多く茂り生じて「ほけの山あひ」と云ひても然るべきものは、榼子の類の「しどめ」といふものなり。これを或はほけといふことは、「木瓜考」に「又一種草間に紅白花を開きて、其實木瓜の小さきなる酸く澁れるものを、俗にしどめとも、ほけとも、又は草ぼけとも云ふなり」とあるにより證すべし。此しどめは地梨子ともいふ。山中甚だ多し。同考に「此物は即ち榼子木の年ごとに草と共に刈られて、其木長すること、叶はで草間にて花を開き、實を結ぶものなりともいふ」と記せるは非なり。しどめは榼子木ほどに長大なるに至らざるものにて、矮性のものなり。此物甚だ山野に多く簇生し、刺有りて人をして歩み難からしむ。之を以て加茂眞淵は「冠辭考」中に、山にかゝる「あしびき」といへる冠辭を解して、此しどめのことにはあらずやと思惟するに及べるほどなり。しどめは是の如く多くして關東其他の山野に茂生すれども、榼子は人家の庭園にこそ見ること多けれ、其の山間に自生することや、多きを見たるは、僅に奥州閉伊郡の立丸峠の北を行きたる時のみ予が記憶に留まれり。されば此「木瓜の山あひ」を地梨子の山あひとする時は、籠輿ゆるすをば、昇く人を哀みてゆるしたりと

解し前句の旅體への逆附とする方可なるに似たり。即ち山間の地に下り立ちて歩み折柄散りかゝれる花を笛に打拂ふとするなり。花は櫻なり。櫻しどめ、凡そ同時なり。一句元來措辭ふつゝかなれば、果して作者の意を得たるや否やを知らず。但しかく解すれば籠輿ゆるす所以もおのづから一句の中に明らかなれど、舊解に従へば、其人を流罪に處せられたるものなど、せざる可からず、然らずば許すといふ所以も明らかならず。又配謫の人と見んには、前句の悠揚たる態との映り甚だおもしろからず思はるゝなり。

骨を見て坐に涙くみ打かへり

芭蕉

此句蓋し寫誤あるべし。字餘りは論せずとするも「涙くみ打かへり」といふところ、言葉の續きさま芭蕉の所爲に似ず。打かへすは繰返すことなれど「打かへり」といふ語、餘り聞及ばず。たゞ打かへると云ふ時は顛倒するやうに聞ゆ。關更七部解には「涙くみ裏かへり」に作る。「裏かへり」は「うちかへり」の填字なるべし。七部木槌には「そゝろに涙くみ百千かへり」に作る。百千かへりは

百千度と云はんが如し。十かへりは、久に經ん友とや君に契るらん十かへりの松の花のさくまで」といへる「新拾遺集の賀の歌」に見ゆ。百千かへりは百かへり千かへりといふことなるべけれど、これも聞かぬ言葉にて、心得がたし。例の冬の日の今の本は再板なれば誤謬多しといへる曲齋は、何事をも知らぬげに「涙打かへり」と改め居れり。「涙打かへり」は言葉づかひ不束ならずや。かへり、かへるといふ語は、返りなり、度々なり、反なり、歸なり、還なり、復なり、報なり、回なり、却なり、再なり、變なり、化なり、解なり、翻なり、打かへるとは何事をいふぞや、芭蕉まさには是の如きの語を使はざるべし。又「打」の一字衍にして、涙くみかへりとせんには、打かへりよりは少し宜しかれど、それにしても歪みたる言葉づかひの難は免れざるべし。空中の教を承くるに似たることなれど、我が無師有統の學より言ふときは、これは斷じて書寫剽削の誤にして、骨を見て坐に涙わきかへりなり。何かへりといふは、例へば「煮えかへり、冷えかへり、冴えかへり、消えかへり、萌えかへり、死にかへり」などの如し、いづれも煮えて煮え、冷えて冷えといふが如く、其事の至つて甚しく重複するをいふなり。わきかへる

は續後拾遺集卷十一、はつ瀬川岩もと去らず行く水のわきかへりてもぬる、袖哉」といへる俊頼朝臣の歌にて知るべし。一句はさまで古からの戰場を縁ある人の訪ひて、白骨いたづらに散じて雄圖すでに空しき山あひに、野花鮮血を點じて、松風喊聲を起すところ、黯然として涙の湧いて已まざるさまなり。さらすば骨を見て坐に涙くみ涙くみ也。別に説あり、今記せず。

乞食の簞をもらふしのゝめ

荷 兮

「乞食の簞をもらひ受けて、これに骨を裹むなり」といへる舊解には従ひがたし、何ぞ非人の破れたる簞に故人の白骨を裹むに忍びんや、人情に遠きことなり。又茶毘の三昧場ならんには豫め持歸るべき心構もあるべき事なり。こは前句の骨骸散亂の地に、さてあるべきにあらねば、其方此方の殘骨を掻集めて之を火化せんとして枯木生柴を積み、今や火を點せんとするところなり。此火は林間に酒を暖むる時の火にもあらず、竈上に粟を炊がんとする折の火にもあらず、吹くも扇ぐもなり難き火なり。僧は此時讀經引導して、炬火をあ

ぐ。これを「秉炬」と云ひて大切の場なり。今火を點せんとして炬無し。炬は葦を束ねて造るものなり。乃ち案内手傳などさせたる丐兒の簞を買得て、これを炬として點火するところを云へるなり。一句悽愴しのゝめ寒く身ぶるひの出づる景なり。或は曰く、世を捨つる發心の體なりと。其解亦妙なり。

泥の上に尾を曳鯉を拾ひえて

杜 國

前句を奪ひて轉じて附けたり。乞食の簞に拾得たる鯉を裹まんとなり。尾を曳く龜は「莊子」に出づ。「寧ろ死して骨を留めて而して貴きを爲さんか、寧ろ其れ生きて尾を塗の中に曳かん乎」とあり。それを尾を曳く鯉と作りたるは、例の誹階なり。鯉は春末夏初にかけて雌雄相追ひ、放卵の爲に淺瀬に上りて歸路を忘れ、泥上に横たはることあるは毎々見るところにして、下總利根川香取神祠の下などにては、鯉みづから神に牲となると、年ごとに必ず有るほどの事なれば、河畔湖邊にてはめづらしからず拾ひ得るもの有るなり。それをたゞ泥の上に尾を曳く鯉と一と節をかしく云ひて、前句を轉せるまでなり。

別義あるにあらず。

御幸に進む水のみくすり

重五

前句の水邊に御幸ありと思ひおこして、水毒を解する薬を献することはいへり。進むは薦むなり。水をめしたまひて失無からんことを願ふにて、裏には水を飲みたまふことを含める勿論なり。水毒を消すの薬、檳榔子、薏苡仁等を用ゐるといふ。但し延喜式などに見えたる定式にはあらず。

殊に照年の小角豆の花もろし

野水

酷暑大旱の年、さゝげの花の脆く落つるを云ひて、前句の水めしたまふを承けたるなり。一句田舎の夏日の景見ゆ。

萱家まばらに炭團つく白

羽笠

小角豆の花の籬にまとへるあたり、茅屋三四不拍子にすとくと炭團にす

べく炭粉搗きたるなり。小角豆の花さく頃を炭團つくは聊か季節不相應のやうなれど、これは「夏仕込」とて、柿を搗き絞りて澁を取りたる糟粕を貼料に用ゐて造るよし、前人の説なり。さらでも炭團は夏多く造るもの也。

芥子尼の小坊ましりに打むれて

荷兮

芥子は罌粟なり。尼は女兒なり。小兒の頭髮を頂にのみ小圓形に留めて、他をすべて剃れば、其状恰も罌粟の實の殻の頂に小さな菊綴の如くなるものあるに似たり。故にかくしたる少女兒を「けし尼」といふなり。明治初季には猶此風残り居りたり、生長の後に其髪的美ならんことを欲するに出づる俗なり。略して「おけし」と云ひ、又「けしぼん」といふ。「芥子坊主」ともいへれど、多く女兒のするなれば、坊主と云はんは當らず、こゝに「芥子尼」と云へるこそ正しけれ。小坊は小坊主にて、芥子尼ほどにも髪を残さず、全く剃りたる幼き男兒なり。坊とのみ云ひて坊主と云はぬは、影法のところ、に註せるを見て曉るべし。幼尼にも、雛僧にもあらぬものを、尼といひ坊といふは俗の通語なり、疑ふ

に足らず。此句を「釋教」として解せるものあるは笑ふべし。(たゞ前句の炭團
搗けるあたりに幼兒の打群れ居れるを云へるまでにて、是の如きの光景は間
々ある事なり。寫實に止まる句をも理屈勃窣として無き柄をとり付くるは
解に過ぎたりといふべく、主觀を喜ぶの弊に陥れるものなり。

折る、蓮の實立てる蓮の實

芭蕉

これも寫生ぶりの句なり。前句の幼兒等の遊べる處の景なり。蓮の實の
功成りたると功成らざると、いさゝかは小兒等に比擬の意も籠るなるべけれ
ど、それを打出し言ひて解せんは過ぎたり。たゞ是荷葉既に秋に遇ひて、蓮の
實の莖の折れたるもあり、立てるもあるなり。

靜さに飯臺のぞく月の前

重五

前句を寺庭と看ての附句なり。飯臺は食卓にて、僧寮などに用ゐらる、衆人
同坐してこれに對ふなり。此句は寺中清寂にして人有りや無しやさへ疑は

るゝほどなるに、來りし者の裏へ廻りて飯臺有るところを覗へば、月もまた飯
臺を覗き居たるさまなり。閑寂の狀よく描かれたり。飯臺の語にて小寺草
庵などならぬは明らかに、却つてやゝ大なる伽藍なりと知るべし。「獨住の庵
へ月見がてら行きたるなり」といへる解はよろしからず。

露おく狐風やかなしき

杜國

前句に荒廢の大寺の風情無きにしもあらず。此句はそこへ付けて、覗くの
一語を狐に奪ひたり。「巢居は風を憂ひ、穴居は雨を悲しむ」ことなるに、風やか
なしきは例の誹諧にして、老狐の月下に立つは云古したる談なり。さればこ
ゝに秋天の月皎く雲絶えたるに、露しつとりと置く夜更けて、冷風動く檜の潤
葉すゝきの穗末萬籟すべて無き中に野狐の餓を、啼くを、風や悲しきとはおも
しらく云へるなり。

釣柿に屋根ふかれたる片庇

羽笠

釣柿は吊りて澁きを甘きにかへす柿なり。片庇は片流れなるひさしなり。「屋根葺かれたる」は是の如き言ひ方も此頃にはあれど、屋根を葺きたると云ふべきなり。強ひて辭どほりに解すれば、釣柿もて屋根葺きたることになり、何とも心得難し。此方より働きかくるを彼方より働きかけらるゝやうに云ふこと、西鶴などの文章にも多く、當時の語法の一なり、疑ふに足らず。一句は田家若くは山家の體にて、前句の露おく頃の實際なり、別にむづかしき義あるにあらず。さゝげの句以下數章、いづれも寫生ぶりの句にして、たゞ是眼前脚下の事、平生日常の狀なり。後の「炭俵等の調こゝらに本づく」「炭俵の調こゝらに萌したりといへるは流石に曲齋も隻眼を具せりといふべし。

豆麩つくりて母の喪に入

野水

豆麩は「まめふ」麩「豆腐」後出の本多く豆腐に作るを以て疑有り。麩はふすまと小麥粉とを鹽水の淡きもて捏ねて成る、是なま麩なり、なま麩を焼きたる、是「焼麩」なり。麩の小なること、木患子ほどなるを「豆麩」といふ。麩は皆其の貯

はへて以て久しきを歴べく、時に應じて食に副ふべきを取る。こゝに豆麩といへるも、喪中の烹炙の煩を除くに充つるとして解すべし。麩及び豆腐、皆今專家ありて製して之を鬻ぐといへども、何人も然のみ之を製するを難んせざるべし。此句豆麩とするも豆腐とするも、たゞ其物少しく異なるのみ、其意畢に同じ、信すべきの古本を得て「麩」腐を決すべきなり。喪屋は大和あたりにては、今もこれを造る、かならず片庇づくりなりと、關更の解に見ゆ。其實否を知らず。

元政の草の袂も破ぬべし

芭蕉

母の喪に入るといへる前句を承けて、孝子の名高き元政を假りて附けたり。元政は石井源八郎、年十三にして井伊氏に仕へ、二十六歳致仕して僧と爲れるものなり。性至孝、十九歳の時、日蓮像を禮して三願を發す、其一に曰く「父母壽考にして長く孝養を盡さんと」。披緇の後、小菴を寺側に設け、稱心庵と號し、二親を居らしむ。母年七十九、身延山に詣らんと欲す。元政扶負して以て行

き、其志を遂げしむ。其孝是の如し。寛文八年、母八十七歳にして死す。元政も尋いで病みて死す、年四十六。「草の袂」といへるは麻衲草衣の境界を甘なへる人たりしによりて云へるなり、古今集其他の歌の詞によりて云へるにはあらず。

伏見木幡の鐘はなをうつ

荷 兮

元政は方外の徒たりと雖も、情深く心美しかりし人にして、持律精嚴ながら、時に源氏物語を講じ、時に雅樂を爲さしめ、風流韻雅、詩を愛し歌を好みたり。其居は深草霞谷瑞光寺にして、伏見木幡皆同じわたりなり。地に寺々多く、古歌もまた多きところなれば、元政靜居の春の夕暮を思ひて、伏見木幡の鐘花をうつとは作れるなり。「新古今集卷二の山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」の歌は、これも歌僧の能因法師が名高き吟なり。彼此思合せて作れるならんが、鐘花をうつとは流石に荷兮の手腕ある句作りなり。はなをうつとあるを、鼻を打つとして、鐘聲鼻頭に逼るなりと解し、隨ひて次句を、南

泉斬猫の禪話と解し、春のしらすを尼御所などの庭とし、水干の句を春の句となせるは、一わたりをかしく聞えざるにもあらねど、蓋し舉句の山茶花の花の字より迷ひたる麥水が千慮の一失ならむ。

いろ深き男猫ひとつを捨兼て

杜 國

猫の戀を附けたり。捨てかねては拋棄しかねてにはあらず、思捨兼ねてなり。いろ深きは美しきにはあらず、牝を追ふの執念きなり。男猫のかへらざるを立ちて待ち居て待つ入相の鐘うつ時、飼主の心も暗くなりゆくさまを云へり。伏見木幡あたりの寡婦か賣女など、猜せらるゝ風情なり。

春のしらすの雪掃をよふ

重 五

「しらすは白砂を敷きたるところ也。後には訟庭などの事のやうになりたれど、貴家の玄關まはり庭まはりなど、白洲あること常なり。前句のいろふかきを美しきと取りて、こゝには餘寒の雪に外を戀ふれども出やらぬ猫を憐

みて、よき家の姫君などの「雪を掃かせよとあるに、侍女どもの男僕を呼ぶところを作りたるなり。調子巧みに一場のさまを見せたり。按じ方深くはあらねど、一句は巧なり。

水干を秀句の聖わかやかに

野水

（水干は糊を用ゐずして水張りにして干したる絹の狩衣の略稱なり。「今昔物語」に「紺の水干に白き帷子を着などいふこと見えたれど、そは稀なることにして、大抵は白なり。官服にあらねば庶人牛飼童まで之を着るとも不思議なし。其製眞の狩衣よりは略なり。聖は「ひじり」にて、ひじりは妄りに使ふべき稱ならねども、中古以來は僧及び僧形の者をすべて聖といひ、高野聖など、乞丐様の者をも云ひ、聖などいふをかきし語も用ゐらるゝに及び、又すべて一道に優れたるものをも聖といふやうになりたり。秀句は初は文字の如く佳句の意に用ゐられたること論無けれども、後にはをかきしき、俳諧體、口合、かけ言葉などの戲謔體の句を云ふやうになりたり。さればこゝに秀句の聖と云

へるは連歌師などの秀句をよくする人といふほどにて、前句の春の白洲に雪掃を呼ぶを、然るべき殿に連歌の會を催されて連衆の參會を迎へ待つため白洲の雪を掃はせらるゝところと看、そこへ參向せる水干に半袴の能く秀句すると云はれたる聖の元氣よく若やかに玉屑を踏みて來れるさまを云へるなり。此聖を竹齋を句はせたりといふは甚だ非なり。（此集の初に狂句として木枯の句をなしたるに對して暗に芭蕉に擬したるは不言の裏に見ゆ。芭蕉が愛せる杜詩の句に「最傳秀句寰區滿」といふもあり、詩家秀句傳といふもあり。野水が此集此師に對する挨拶もかすかに見えて、手の利きたる句なり。）

山茶花句ふ笠の木からし

羽笠

前句の聖の笠に山茶花のはらりと木からし一吹して散りかゝりたるなり。卷首の「誰そやとばしる笠の山茶花」と遙に相應じて美しくおもしろし。羽笠も拙からず一卷を結びたりといふべし。

「霜月の巻終」

追加

いかに見よとつれなき牛を打あられ 羽 笠

此句「一葉集」には、つれなきとあり。「七部解」木槌には、つれなくとあり。「黄華庵本」にも、つれなくとあり。「大鏡」には、難面とあり。婆心録には、つれなしとあり。「つれなき」つれなしならば、そこに一度切りて讀むべきなり。「つれなく」ならば、牛を打つ霰かなと、「哉」の語を意中に添へて味はふべし、字留りの句には、哉を添へて味はふべきもの多きなり。「新撰六帖題和歌集」第二帖藤原信實朝臣、刈小田の鳴のうは毛にふるあられ玉して鳥をうつかとぞ見る、これに因みて連歌に行助、玉をもて鳥をうち野の霰哉、内野は九重の内野にて「打つ」と懸けたるまでの作意なり。此句は鳴などの小さき鳥にかへて鈍重厩大の牛を霰にあしらひて、しかも、いかに見よとつれなくと云ひ出でたる、行助などが作とは異りて甚だおもしろし。「牛の強くして鈍なるをさへ打つはつれなし」と、仁

恕の念に一句のたましひ人を啓けり、と何丸等が解けるに、麥水はまた「天地不仁、以萬物爲芻狗」といへる老子の語によりて、これも亦妙なりとなせるなり」と解けるもおもしろし。佳詩は水の如し、畢竟「一水六觀」なり。こちたく是非を辨つに足らず、一句たゞ一句のまゝなるが眞なり。

樽火にあぶる枯原の松

荷 兮

樽と切りて讀むべし。樽は酒樽なり。一句は枯原の松の根方にて酒を樽ながら火にあぶるなり。牛追ふ者共、牛多く牽連れて風餐露宿して遠行する時の態を寫せり。牛を他國へ賣るにも、又は種々の商品を他國へ搬ぶにも、牛隊をつくりて野越え山越えして、野中にも山中にも宿りつゝ行くこと、奥州福岡、南部、會津などの者のする習なり。又或はたゞ牛に餌かはんが爲に、二日も三日もかゝる牛づれの旅をする事もあるなり。吾が目撃したるは巖手縣内の事なれど、思ふに古は到るところにかゝる習有りしなるべし。枯原の松といへるに、高原のさま見えて畫の如し。

木賊かり下着に髪を茶筌して

重五

木賊かりは神事の折の「能」の「木賊刈」などにあらず、たゞ木賊かりなり。下着は襦衣にもあらず、重衣の下衣にもあらず、よからぬ衣、上等ならぬ衣、卑語に「したうま」といふやうの事ならむ。或は「下着」の二字もしたゞ當字にて「したき」ならむには「したき」は奥州の方言にて「唾」のことなり。よく／＼あさましき山中にては、水までにも及ばず、髪を理むるに唾にてそ／＼けたるを貼け、其儘取上ぐるなり。茶筌髪は髪を一處に束ねたるまでの髪にて、其形茶筌の如くなる故に名あり。紐もても紙緒もても束ぬれど、賤しき民は藁などもても束ねたむ。「鷹筑波集、安井正親、品々の茶筌髪でや木曾踊、織田信雄幼名、御茶筌也。貴賤共に茶筌髪したるは明らかたれど、漸く廢りて山間賤夫にのみ茶筌髪残るやうになり、徳川氏末に至りては夫を失ひたる女の落飾の意にて此髪さまを爲すに及び、句中のは木賊刈とあれば藁なども束ぬる風情にもあるべく、随ひて「したき」を唾とすれば、卑陋甚しくはあれど、「したき」に「の」に文字も浮泛な

らず解せらる。前句とのかゝり、解するまでも無く、其人の姿なり。扱是の如くは解すれども、木賊刈の能として解するも亦おもしろからずといふ可からず。但し、樽火にあぶるを「庭燎」或は「御火焼」等の神事と見て附けたりと云はゞ甘心し難し。前句を「木賊刈曲中の景」と見て附けたりとなさば、此句を「下着に髪を茶筌」にして、今や場に上らんとするところともいふべし。木賊刈の曲には、旦過ツクの一夜に、酒を侷めらるゝくだりありて、山中の老夫と、僧となりたる松若との、親子再會の悲喜交錯するいと好き情景もあり、樽火にあぶる枯原の松の一句も、ふさはしからぬにあらざるを以てなり。機轉のはたらきより云へば能と解したき心地もすれど、下着の二字のあて字ならんには、猶前解をもて自然なりと爲すべし。

檜笠に宮をやつす朝露

杜國

用明天皇の位に即きたまはざる前の佛なりなどいへるは用ゐ難し。たゞ是亂離の世、かゝることも有りけんとの空想の句なり。強ひて何の宮の佛な

どし尋ねんには、南朝の宮がたの中、こゝに適當する事跡も有らんが、然のみ穿鑿の要は無き落人の朝のさまなり。

銀に蛤かはん月は海

芭蕉

「銀に蛤買はむといへるところ、雲上の事にして地下の詞ならず」と前人の云へる甚だよし。黄金あり白銀あり、たゞ是錢無し、詩無く歌無けれども、風光好し、と麥水の想へるも甚だ妙なり。

ひたりに橋をすかす岐阜山

野水

前句を「桑名の焼蛤買はんとするところ」と見立てたりとの舊解は俗眼卑情なり。たゞ海近く川大にして橋長く山遠き風景なり。一々こもたく論ずべきならず。おほどかに美しき景をあらはして前句の人々の立てる處を如實にしたるなり。

「あられの巻終」

531
4

終